高等師範學校
東京女子高等師範學校
蹴球部
編纂

フットボール

明治
41 6 24
内交

大日本圖書株式會社

鍛錬

甲南

序

すべての運動遊戯が、身體上、並に、精神上に及ぼす影響の至大なることは、誰もよく知り切つて居ることてある。

扨、然らば何が最も適當な運動遊戯てあらうか？といふと、随分、色々ある中でも、このフットボール程、有益て、且つ、興味あるものは他に多くはあるまいと思はれる。

先年余が欧米諸國を遊歴して、彼の地に行はるゝ諸種の運動遊戯を視察したが、就中英米地方は、このフットボール・ゲームが甚だ盛て、彼等の紳士的精神の修養と、剛健なる體格の練磨とは、尤も多く此の遊戯によつて得らるる樣てある。

抑も此の遊戯の特色とする所は、勿論、色々あるが、常に人數を多く要し精力的てあつて、絶えず協同一致の行動をとらなければならぬ所は、その

自序

近來フットボールについては多くの識者の注意をひき、此の技の漸く發展して行く有樣を見て吾々は大に喜ばしい事に思ふ、然るに本技に關してその方法注意等を書いたものには曩の我が部の著「アッソシエーション フットボール」があるけれども、元來之は本邦に於ける此の技創設の當初、重にその方法だけを說いたのに止まり、其の眞髓を知るに由なかつたのである。且多少在來の運動遊戲と趣を異にして居る爲め實際の場合幾多の方法上の疑問を生じて居つた。

そこて吾々は始終その不備の點を十分に補ひたい覺悟て、數年間毎年一二回づゝ外人等と競技を重ね、少いながら實際上から其の眞髓と興味とを味ひ得たと信じ、茲に前著を全然改訂する必要を生じた。加之諸方の中學校、師範學校などから度々此のフットボールについて競技法等を問ひ合

身體的方面、並に精神的方面に多大の好果あることは、余が深く信ずる所てある。

近來、我が國て、此の遊戲が漸く盛にならうといふのは、誠に喜ばしい現象てあるが、未だその方法が十分知れ亘らないのは甚だ殘念に思ふ。そこて我が蹴球部の主事は、數年の實驗に基づける幾多の例證を擧げて、今回、新たに「フットボール」といふ書を編して世に公にすることゝした。

そして余にその序文を乞うて來た、現今の如くフットボールの盛が各地に起れる時に當つて、此の書の世に出づるのは誠に斯道發達に益すること と信ずる。

余はこゝに所感を述べて我が國民男子はよろしく此の遊戲を試みて、切に心身上の好果を收めらるゝ樣、深く深く望む所てある。

蹴球部々長　坪井玄道

フットボール

目次

第一編

第一節　緒論……一
第二節　フットボールの歴史……七
(一)古いフットボール……八
(二)アッソシエーシ■ン・フットボールとラグビー・フットボール……九
(三)我が國のフットボール……一一

第二編

せられるので、旁〻茲に本書を公にするに至つたのである。

本書は專ら平易通俗の文辭を用ひ、全く此の技を初めて知らうといふ人々にもよく分る樣にと期した。

終りに本書を著はすに關し、我が校友會長嘉納治五郎閣下は特に題字を賜はり、部長坪井玄道先生は親しく校閲の勞をとられ、並に序文を賜はり、部員細木志朗氏、重藤省一氏は一部の分擔執筆を快諾せられし、上なほ幾多の注意を與へられ、三屋靜氏は文辭の校正を加へられ、殊に細木氏は多くの挿圖の撮影等に關して多大の勞力を惜まれなかつたこと等は特にこゝに記して謝意を表する次第である。

蹴球部主事　新帶國太郎
同　落合秀保

第一節　フィールド……一六
(一)フィールドに適する土地……一六
(二)フィールドの廣さ……一六
(三)フィールドの作り方……一八
タッチ・ライン及びゴール・ライン　ハーフ・ウェー・ライン
サークル　ゴール　ペナルティ・エレア　ペナルティ・キック・マーク　ゴール・エレア
第二節　競技者の人數と位置……二六
一、ゴール・キーパー　二、フル・バック　三、ハーフ・バック　四、フォーアワード
第三節　競技者の任務……三〇
(イ)總　說……三〇
(ロ)ゴール・キーパー……三一
沈着　果斷
(ハ)フル・バック……三三
強蹴　機敏
(ニ)ハーフ・バック……三四
疾走　奪球
(ホ)フォーアワード……三五
輕快　蹴渡すこと　正蹴
(ヘ)キャプテイン……三六
第四節　レフェリーとラインス・マン……三七
第五節　ゲームに用ふる言葉の意味……三八
一、ドリブリング　二、パッシング　三、ヘッディング　四、フ

リー・キック　五、ペナルティ・キック　六、ゴール・キック　七、コーナー・キック　八、オフ・サイド　九、アウト・オブ・プレー　一〇、ゴール
第六節　用具……四四
(イ)ボール附修繕……四四
(ロ)空氣ポンプ及びヤットコ……四七
(ハ)グローヴ(手套)……四八
(ニ)呼子笛……四九
第三編
第一節　ゲームの規定……五〇
(イ)ゲームの時間及び勝敗……五〇

(ロ)ゲームの開始……五一
(ハ)ゲーム中の要件……五三
(ニ)ゴール・キーパーの特權……五八
(ホ)オフ・サイド……五九
審判上の注意……七一
ゴールの位置の選擇と蹴始め　フリー・キック　ラインス・マン　投げ込み　ゴール・キックとコーナー・キック　ハーフ・タイム　ハーフ・タイム後　得點後の蹴始め　反則　ペナルティ・キック　必要あつて一時ゲームを中止する場合　笛の意義　ボールがレフェリー等に觸れた場合　ゴール　レフェリーの絶對的權力
第四編

第一節　ゲームの例……八三
第二節　ゲーム以外の練習……九八
(一)基本練習……九九
(二)パス……一〇四
(三)ドリブリング……一〇五
(四)ドリブリングとパス……一〇七
(五)ゴールに蹴込む練習……一〇九
(六)コーナー・キック……一一三
小人數の競技法……一一四
第三節　服裝に就いて……一一五
シャツ　ズボン　胴メ　靴下　靴　帽子
特に靴の保存法に就いて……一二四

附錄
著者の經驗……一二七
第一節　小引……一二七
第二節　ゴール・キーパーに就いて……新帶國太郎……一二九
一、防禦の時　二、コーナー・キックとペナルティ・キック　三、
攻撃の時　四、ゴール・キック　五、フル・バックとの連絡　六、
ゲーム以外の練習
第三節　フル・バックに就いて……重藤省一……一四二
(一)拳球……一四三
(二)明確なる判斷……一四六
(三)蹴方の姿勢……一四六
(四)確實なる蹴方……一四七

(五)任意なる方向への蹴方……一四八
(六)蹴方の種類……一五〇
一、靜止せるボールを蹴ること　二、地上をころがり來るボールを蹴ること　三、バウンドせるボールを蹴ること　四、フライ・ボールをとめて蹴ること　五、ヴォレー　六、半ヴォレー
(七)ヘッディング……一五三
(八)快速なること……一五三
(九)ゴール・キーパーとの連絡……一五四
第四節　ハーフ・バックに就いて……落合秀保……一五四
(一)一般の注意……一五五
(イ)奪球の方法　(ロ)防禦の方法

(二)センター・ハーフ……一五九
(三)ライト・ハーフとレフト・ハーフ……一六〇
(イ)投入の方法　(ロ)味方のコーナー・キックの場合　(ハ)敵のフォーアワード對抗
第五節　フォーアワードに就いて……一六三
(甲)アウトサイド・フォーアワード……細木志明……一六三
(一)任務に就いて……一六四
(二)資格に就いて……一六五
(イ)動作の輕快なること　(ロ)ボールを扱ふに巧みなること　(ハ)駈ける事の速きを要する事
(三)攻撃にある場合の心得……一七〇
(四)守勢にある場合の心得……一七三

技競ルーボトップ

目次

(五) パッスの仕方及びボールの止め方……一七四
(乙) センター・フォーアワード……落合秀保……一七六
(一) 一般の注意……一七六
(二) アウトサイド・フォーアワードとの連絡……一七七
(三) ゴールに蹴込む時……一八〇
(四) ゴール・キックの場合……一八二
(イ) 敵のゴール・キックの場合　(ロ) 味方のゴール・キックの場合
(五) コーナー・キックの場合……一八七
(六) ヘッディング……一八八
(七) ペナルティ・キック……一九一
(丙) インナー・フォーアワード……一九二

終

フットボール

東京高等師範學校
校友會蹴球部編纂

第一編

第一節 緒論

凡そ運動は如何なる運動でも、運動その物が目的ではない。躰を練ると同時に精神の修養をなし、他日大に活動をする土臺を作るのである。學校にある我々學生は、どんなに重い課業を課せられても、それが爲めに蒼くなつて、病氣になるなどいふ事なく、續けざまに試驗をせられても、躰の事は少しも心配なく、平氣て之に堪へるだけの躰がなければならぬ。又社會へ出て仕事に忙しい人でも、それが爲めに躰をわるくするといふやうな

事がない爲めに、一方で常に躰を練らなければならぬ。即ち運動で躰を鍛へて、その躰を土臺にして、何でも銘々の志す事をしようといふので、躰を練るのが最後の目的ではない。別に銘々の持つて居る重大な目的を達する爲めに、精神の修養をなし、その土臺を作るのが運動の目的である。運動の爲めに、重大な目的を妨げられるやうな事があつては、運動の効は少しもないと云つていゝ。學生が學課を後まはしにして運動にふけるなどはよくある例で、運動の選手は、兎角學科の成績がわるいとは、よく聞く事でるあが、これは甚だよくない。目的を犧牲にして、手段たる運動に熱中する如きは、實に愚の極である。フットボールはこの點に於て最も勝れた多くの特徴を以て居る。他の運動とは全く趣を異にした、文明的な點を具へて居る。それは競技の時間に制限がある事である。他の多くの運動の樣に、競技の時にも、只、何回ゲーム、何本勝負といつて、時間の制限がなく、まして常の

練習には少しの制限もなく、おもしろければ何時間でもやる、といふ樣な種類の運動とは異つて、前以てゲームの時間を極め、その時が來れば、即ち競技をきちんとやめるのである。

次にフットボールは、敵味方十一人づゝ、即ち二十二人といふ大勢の者が、一時に行ふ事が出來る(尙大勢でも差つかへない)。然もその組の者十一人は、互に連絡があり統一がある事、恰も五本の指のやうでなければならぬ。十一人が別々に、思ひ〳〵に働いても、何の役にもたゝぬ。恰度竹篦(シツペイ)五つよりも、握り拳で一つなぐつた方が、利き目があると同じことで、十一人は團結して、何處までも互に扶け合つて、拔け駈けの功名といふやうな考は、根本から去つてしまつて、組全躰の爲めには自分の身を犧牲にして働かねばならぬ。言ひ換へれば、この運動をする時は、組といふ考の外に、自分といふ考があつてはならぬ。團躰的のものであつて、決して個人的のものではな

い。

次に我が國昔からの運動は、柔道でも撃劍でも皆室内の運動であつて、中には衛生上からいへばあまりよくないのもある。又歐米から輸入せられた多くの戸外動運でも、冬になれば一時休止の姿となる。兎角冬季は人のすつこみ易い時である。此様な時に方つて、この要求を滿すのは、即ちフットボールである。ひゆう〳〵と寒い風が、窓の外に吹きあれ、硝子越に、彼がばら〳〵と降るのを見る時には、ともすると縮まり勝ちで、土曜日の午後や日曜日の一日位は、徒に雜談に費す者が少くない。こんな時に、シャツ一枚ひらりと運動場に躍り出て、大きなボールを自由自在に、蹴つたり飛ばしたり、汗になつて勇ましく走りまはる時の心持は、到底筆でも口でも盡す事は出來ない。運動して躰が心から溫まつたのと、火鉢やストーブで外面から炙つたのとはまるで曖昧が違ふ。火鉢やストーブを圍んで、雜談に耽

つてゐる人々は、この愉快、この男らしい快味を味ふことは出來ぬ。

一躰に運動をなすにはどんな運動でも、其の器具を買ふ爲めに多少の經費はかゝる、中には非常に多くの費用のかゝるものもある、このフットボールは又この點に於ても最も優つて居る。只一つのボールさへあれば、多數の人が愉快に運動する事が出來る、僅かに二三人の者の爲めに占有されて、他の者は徒に傍て見てゐなければならぬ樣な運動とは違つて、多人數一緒に樂むことが出來る、然も一個のボールは叮嚀に使用すれば數ケ月の久しきに堪へる、極めて經濟的な運動である、又このボールは他に種々の應用の途がある、ドッヂボールを初め種々の遊戲はこのフットボールを使つて出來るのである。

現に我が國に行はれて居る各種の運動の内で、最も男らしく、時間に制限があり、所謂運動家の陷り易い、耽けるといふ事なく、團躰的であつて、數十

人も一時に行ふ事が出來、危險の恐は勿論なく、冬季最もすつこみ勝ちになる弊を矯める事が出來、野外殊に廣々した、善き空氣の中て行ふ運動て、然も極めて少しの費用を以てする事の出來るのは、實にフットボールの特徴てある。余は現今我國に行はれて居る殆ど凡ての運動を實際にやつて見た。隨分熱心にやつた。そしてこのフットボールは、吾々學生に取つて、殊に最も適した運動てあるといふ事を感じた。フットボールを選んだのは、實にこれに由るのてある。讀者諸君にこのフットボールを勸めるのも、亦實にこの故てある。

日本人の躰格が歐米人に劣つてゐる事は、誰しも認めて居る所てあつて、殊にその最も劣つて居るのは脚てある。腰から上はさう大した優劣はない樣てあるが、足に至つては實に甚しい。諸君の内まだ實際に比べて見た事のない方は、左程にも思はれないか知らぬが、吾々が數回彼等外國人と、

運動場て競技をした結果は、吾々をして痛切に、日本人の足の發達の不十分な事を感ぜしめた。外人と向き合つて居ると、耻しい程てある。吾々の足の發達せぬのは、座る習慣がその原因てあるやうてあるが、今急に全然座る習慣をやめるのは、家の建て方からして、根本的に改めなければならぬから、是は先づ一寸不可能の事てある。然るにこの缺點を補ふ運動は、フットボールを除いては殆どない。いやフットボールのやうに効果の著しいものは全くない。吾々の經驗から推すと、若しこのフットボールを、小學校の時代から續けてやつたならば、日本人の躰格を良くする上にも、その効果は決して少くないてあらうと思ふ。

第二節　フットボールの歷史

フットボールは、現今ては、英國などの樣に國技として、盛にやつてゐる處もあるし、その他歐米各國の何れても、主要な運動の一として、重んぜられて

居る。又我國でも、近來漸く識者の注目する所となつて、運動として奬勵する價値のある事が認められ、將に勃興しようとする機運に向つてゐる、遠からずして我國運動の重要なるものとなるであらう。

(一) 古いフットボール

抑このフットボールは、何時頃始まつて、如何なる變遷をして、今日に至つたのであるか、言ひ換へれば、どんな歴史をもつてゐるか、これをしらべて見るに、古くギリシヤ時代に既にあつた樣である。しかしどういふゲームのやり方であつたかは知る事が出來ない。その後の歴史は杳として傳はらない。十六七世紀の頃になつて、英國あたりで、非常に亂暴な競技法が行はれた爲め、漸く廢れて來たのである、その後又英國の學校等で、各思ひ〳〵の規定を作つて、ゲームをしてゐたが、同じフットボールをするのに、そう規定がまち〳〵になつて別れてゐては面白くないから、更めて規定を統一

して、皆その規定によつてすることにしたらよからう、と言ふ説を出すものがあつて、各學校等から委員を出して、會議を開き、法式を一定したのが今から數十年前の事であつた。然るにその後、又その規約に異議を申し込んで、新たに決定した規約には不服である、といひ出す者があつたが、一般に、フットボールは勇壯な男らしい運動で、實に面白いといふので、非常な勢で勃興した。次いで西暦紀元千八百七十二年、恰度今から三十六年前に、イングランドとスコットランドとの、第一回の對抗マッチが行はれた。日本で言へば、關東關西の競技ともいふ可きであらう。此のマッチは、それから引き續いて毎年行はれ、この外にも至る處で、盛に行はれ、遂に英國の國技となつて、今益盛に行はれて居る。

(二) アッソシエーション・フットボールとラグビー・フットボール

又前に述べた、會議の規約に異議を申し出した一派の者は、別に同志を集

めて、ラグビー・フットボールといふ法式を立てゝやつてゐる、これは重に米國に行はれてゐるやうてある。これと區別する爲めに、今この書に說明しようとするフットボールを、アッソシエーション・フットボールともいふ、このフットボールは、名の示す如く蹴球(Foot ball)て、即ち足てやるのてあるが、ラグビー・フットボールの方は、名はフットボールてあるけれども、實は足よりも寧ろ手の方を多く使ふ。それのみならず競技法が非常に激烈て、從つて危險の恐がある。先年米國の學校て、フットボールを禁ずるなどゝいつて、一時世間の問題になつたのも、實にこのラグビー式フットボールに關しての事てある。吾々の先生にも、英國人て非常にフットボールの好きな人があつた。曾てラグビー式のをやつて、肋骨を折つて以來は、ラグビーの方をやめて、アッソシエーションの方ばかりをやつて居る。ラグビー式のをやつて肋骨を折つた例は、決して珍しくない、と話して居られた。要するにラグビー式フット

ボールは、運動が激烈て危險が多いけれども、今吾々の採つて居るアッソシエーション式は、危險の恐はない。一寸考へると、一つのボールを敵味方て蹴る時は、稀には敵の脛を蹴る時もあらう、と思はれないてもないが、實際やつて見ると、決してそんな事はない。若しあるとすれば、それは極めて初歩の時に、何もわからず無暗にボールの所に寄り集つて來る時てあらう。少し慣れて來れば、人を蹴るなどゝいふ事の少しもないのは、吾々が經驗の示すところてある。

(三)我が國のフットボール

抑も我が國て、初めてこのフットボールをやつたのは、明治十一二年の頃てある。當時恰も躰操傳習所といふのが出來て居て、外國人を雇うてしきりに躰操を習つて居たその時にその先生が初めて、歐米てはフットボールといつて、大きなボールて以てやる遊戲がある。極めて面白い遊戲て、あちら

ては實に盛なもので、そのやり方はしかく〳〵、と話されたところ、それは面白からう、早速教へて貰ひたい、といふので、それてはと、茲に始めて日本に於てフットボールといふものが行はれるやうになつたのである。

それては日本には、日本のフットボールといふものはないかといふに、日本獨特のフットボールがある。古い記錄をしらべて見るに、皇極天皇の頃に始まつたらしく、誰でも知つてゐる彼の中大兄皇子が蹴鞠をして遊んで居られた時、御靴がぬげて飛んだのを、藤原鎌足公が側から取つて捧げたといふ話がある。是より以前には、ちつとも蹴鞠の事が見えない、或人は支那から傳はつたのだと言つて居るが、この時代の有樣から考へて見るに、或はさうかも知れぬ。支那には是よりとずつと以前にすでにあつた事は歷史に明かてあるが、しかしそれが我が國に傳つたのてあるかどうかは、記錄の依る可きものがないから分らぬ。此の蹴鞠は英語ていへば即ちフット

ボールてある。勿論法式などは全くちがふ。ボールは矢張り革て作つてあつて、今も東京の博物館に行けば、實物を見る事が出來る。庭の四隅に柳、松、楓、櫻を植えて、その下に並んて互に蹴合ふといふ、中々優美なやり方てあつたらしい。古い繪圖などを見ても、東帶や直衣のまゝて、おもしろさうにやつてゐるところが畫いてある。半ズボンにシャツ一枚てやる今のフットボールとは全く趣が違つて、余程優美なものてあつた樣に思はれる。足利時代から德川時代までも、稀に行はれたと見えて、飛鳥井家は、蹴鞠の家として傳はつて居る。

さて明治十一二年頃に躰操傳習所てやつてゐたフットボールは、我が國各地方に弘まつたやうてあるけれども、その法式は種々樣々てある。思ふに傳へ傳へて行く內に、誤つて傳へ、或は自分勝手に法式をたてたのもあらう。これまて各地て行はれて居るのを見ると、實に千態萬狀てあるが、多く

は、只徒にボールばかりあつて、使ひ途を知らず、一つのボールを追うて、數百人が押し合ふやうな亂暴な事をしてゐる。

數年前東京高等師範學校で、更に正式にフットボールを始め、屢〻横濱の外人とマッチを行ひ、慶應義塾でも亦ラグビー式フットボールを始めて、横濱外人とマッチを試みた。何れもまだ大に發展の余地がある。一昨年頃から東京府師範學校でも亦フットボールを始め、昨年の十一月に高等師範學校とマッチをした。惟ふにこれは我が國に於ける日本人同士のフットボール・マッチの始めてあらう。續いて高等師範と慈惠醫院醫學專門學校とのマッチがあつた。東京に於てこのやうに一時に勃興しつゝあるのみならず、各地方に於ても亦頻りにフットボールの聲が高くなつて、愛知縣、山形縣、福島縣、茨城縣、埼玉縣等の各師範學校では、已に盛にやつて居る。その他中學等でもやつてゐる所もあるし、又始めようとしてゐる所も澤山あるやうである。遠から

ずして各地に勃興するであらう。殊に今年二月の高等師範と横濱外人とのマッチに、高等師範が外人を破つてより、急にフットボールの聲が高くなり、大いに勃興する形勢を現はして來た。

第二編

第一節　フィールド

フィールドはゲームをする場所即ち競技場の事である、相撲に土俵が大切であり、ローン・テニスにコートが必要である様に、フットボールには此のフィールドはゲームをなすにも又單に練習をなすにも無くてはならぬものである、故にその構造の良否の如きも、競技をする上に大關係のある事で、フィールドが惡いと興味も少く、技術の進歩もおそく、且危險なことがある。之に反してフィールドが完全であると、競技や練習も思ふ様に行はれ、その進歩も著しく、興味も多いから、出來得る限り良くするのが得策である。

(一)　フィールドに適する土地

フィールドの作り方を述べる前に如何なる土地を選んで之に充てゝよいか

かといふに、先づ差支ないだけの廣さが無ければならぬことは勿論であるが、地面に甚しい傾斜や凸凹があつてはいけない。フィールドの中央部が極少しく高くて四方に甚だゆるやかに傾いて居る土地は、雨降りの後などに排水がよく、却つて都合がよい。片方が高くて片方が低い地面では、排水はよいが、競技には常に、不公平が生じ易い。又全身の力を込めてボールを蹴り、滿身の勇を鼓して走る様な場合には、躓いて倒れ、又は足を挫く様な事が無いとも限らぬから、躓く様な物は取りのけ、足を挫く恐れのある凹みがあれば之を埋め、又大きな石が地上にあらはれ、又瓦礫の散在して居るのも危險であるから、取り除いて少しも心配なく走りまはる事の出來る様にせねばならぬ。

一面に芝を植え付け刈り縮めた芝生の地は、殆んど完全なフィールドを作ることが出來るが、然し之は作る上にも又保存して行く上にも、少からぬ

經費と勞力とを要し、且春季新芽の萠え出づる時節は、一時フィールドを使ふことが出來ないから、之は殆んど望まれないことである要するに學校などでは、差當り運動場を利用して前に述べた事柄に照し合せてフィールドを作つてよからう。

(二) フィールドの廣さ

フィールドの全形は先づ長方形て長さと幅とは略三と二との割合てある。歐米ては一般に長さを五十五間乃至六十間幅を三十五間乃至四十間と定めて居る。然し此の定めは躰格の偉大な歐米人を標準としたものてあるから、餘儀なき事情があり、或は競技者の躰力に過不足があるならば少しは其の廣さを加減して差支ない。要するに此の定めに準じて作ればいゝのてある。フィールドの廣さは前述の通りてあるが、此のフィールドの周圍に接して直に壁や塀があつたり、間近に樹木や石があつたりしてはいけ

ない、此等は單に危險の恐のあるばかりてなく、競技中には屢身をフィールド外に置いて動作せねばならぬ事があるから、周圍にも二三間づゝの餘裕を置く必要がある。

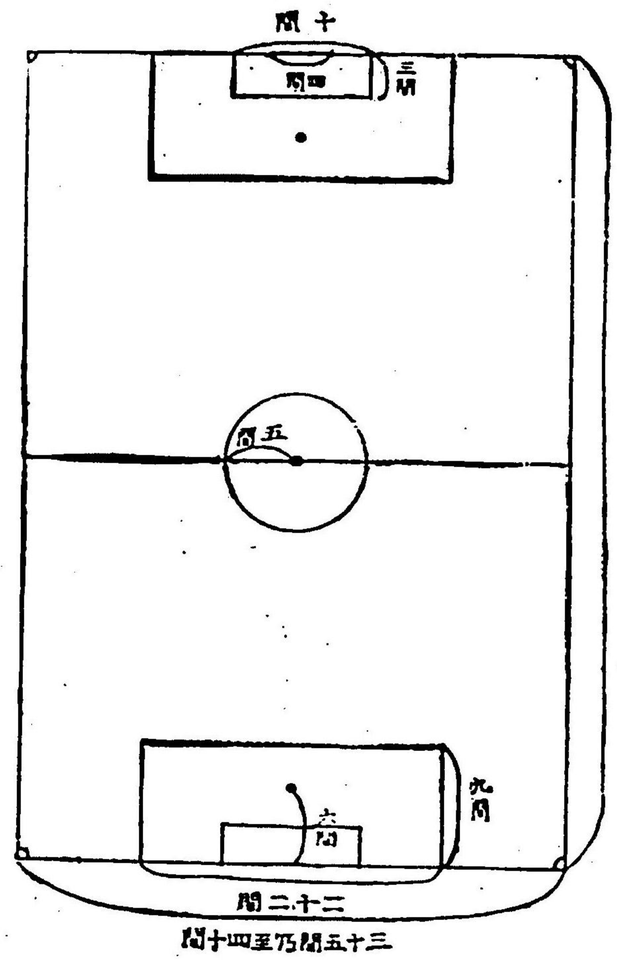
(三) フィールドの作り方

此の樣にして適當な地面を得たならば、前に述べた廣さを標準としてフィールドを作るのてあるが、フィールド內には色々なラインや樣々なしるしがあつて、夫々名稱もあるから次に說明する。

タッチ・ライン及びゴール・ライン Touch line and Goal line.

長方形をなして居るフィールドの、長い兩側の線をタッチ・ラインといひ、短い兩端の線をゴール・ラインといふ。此の二種のラインてフィールドの外廓をなすのてある。タッチ・ラインとゴール・ラインとて形作つた長方形の四隅はコーナー Corner といつて、フィールドの外廓を一見して明かなら

第一圖　フィールドの形及び廣さ



立てなくてもよいが、立てた以上は邪魔になることがあつても抜き取しめる爲めにこゝに旗を立てる。此の旗の色合ひの如きは別に定めはない。旗竿は長さ五尺以上あるを要する。此の旗は略式では

ることは許さない。

又此の四隅の點を中心として三尺の半徑でフィールドの內側へ四分の一の圓弧を畫く、此れは後に述ぶるコーナー・キックをする時に當つてボールを置く範圍を示すのである。

ハーフ・ウェー・ライン　Halfway line.

各のタッチ・ラインの中點を結びつけたラインで、此のラインでフィールドを二等分する事になる。

サークル　Circle.

ハーフ・ウェー・ラインの中點を中心として五間の半徑で畫いた圓をいふ。此の中心とした點はゲームを始める際、ボールを置く場所であるからしるしをつける。

ゴール　Goal

ゴール・ラインの中點から各コーナーの方へ二間の所に、高さ八尺の柱を樹てる。此の柱は四寸角でそれ以上太くては宜しくない。此の二本の柱の上に仝じ太さの角柱を横に渡して冂形にし、決して倒れない様にする。これが即ちゴールである。ゴールは常に雨風にさらされるから、防腐の爲めにペンキ、又は澁を塗る。尙ほ各のゴールには後の方(即ちフィールドの外側)へゲームの際ボールがゴールに入つたか否かを正確に知るために袋様のネットを張る。

右に述べたゴールの構造は最も完全なものであるが、然し費用が無いとか、或は一時、間に合せに設ける場合には竹竿、又は細い丸太を縛つて代用し、ネットも用ゐずにゲームを行ふ事も出來る。

今述べたゴールの大さは大人を標準としたのであるから、競技者の躰格身長によつては多少手加減を加へてもよい。

ペナルティ・エレア Penalty area.

各のゴールの柱からその側(がわ)のコーナーの方へ各九間の處に、高さ八尺の柱を樹てる。此の柱は四寸角でそれ以上太くては宜しくない。此の二本の柱の上に仝じ太さの角柱を横に渡して冂形にし、決して倒れない様にする。これが即ちゴールである。ゴールは常に雨風にさらされるから、防腐の爲めにペンキ、又は澁を塗る。尙ほ各のゴールには後の方(即ちフィールドの外側)へゲームの際ボールがゴールに入つたか否かを正確に知るために袋様のネットを張る。

右に述べたゴールの構造は最も完全なものであるが、然し費用が無いとか、或は一時、間に合せに設ける場合には竹竿、又は細い丸太を縛つて代用し、ネットも用ゐずにゲームを行ふ事も出來る。

今述べたゴールの大さは大人を標準としたのであるから、競技者の躰格身長によつては多少手加減を加へてもよい。

ペナルティ・エレア Penalty area.

各のゴールの柱からその側(がわ)のコーナーの方へ各九間の處から直角にフィールドの内方へ各九間の長さの線を引き、此の兩線の端を連結して長方形を作る、此の區域内をペナルティ・エレアと云ふ。

ペナルティ・キック・マーク Penalty kick mark.

ゴールの眞正面前方六間の處に施すしるしてある。

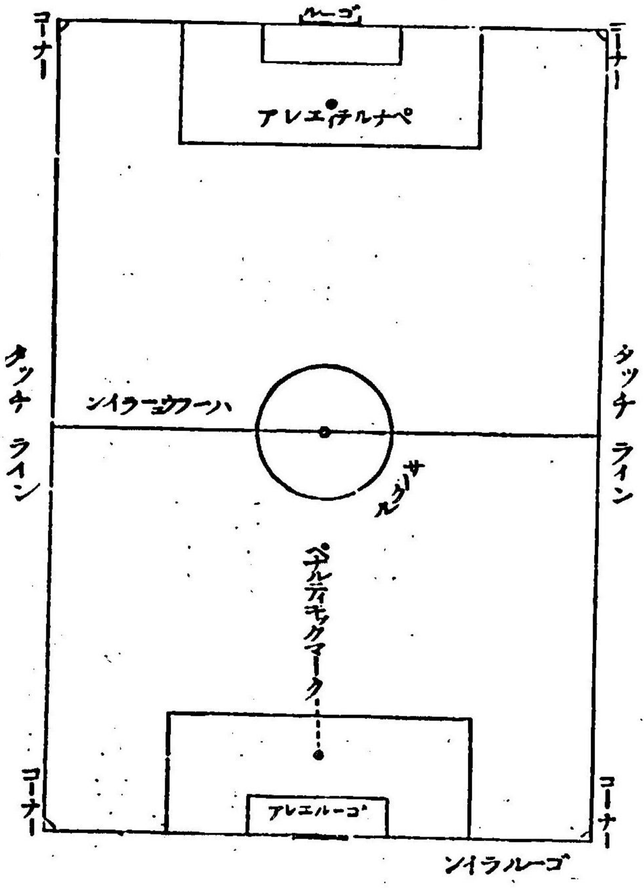
ゴール・エレア Goal area.

各のゴールの柱からその側(がわ)のコーナーの方へ各三間の點から直角にフィールドの内方へ各三間の線を引き、兩端を連結して一つの長方形を作る。ペナルティ・エレア内の此の區域のことを特にゴール・エレアといふ。

此等ペナルティ・エレア、ペナルティ・キック・マーク、ゴール・エレア等の事は、少しく煩雑になるから、後に至つて詳しく説明する。

の廣さしるしの位置なども權衡を失はない限り斟酌してもよい。

第二圖　フィールド内の部分の名稱



今まで述べたのはフィールドの標準の廣さをもととして割り出したのであるから、フィールドの廣さが前述べた標準に甚しく相違して居れば、二種のエレア

此等ラインやしるしを畫くには、假に繩を引いて之を定規として石灰粉、又は磨砂を以て畫くのが最も簡便である、石灰粉を以てする場合には水を加へて土瓶の様な器の中に入れ定規繩に沿うて流すとよい。東京邊で資つて居る磨砂の様に小さな紙袋に入れたものは袋の一隅を破つて地面にこすれば思ふ様に畫かれる。然し石灰粉も磨砂も雨に流され風に散らされ到底永くは持たぬ。度々畫きかへる必要が起るから都合によつてはタッチ・ライン、ゴール・ライン位は蓑繩、又は棕櫚繩を強く張つて之に代へてもよい。但し此等は折釘を深く打ち込んで善く地面に密着せしめて疾走の際に決して足に引かゝらない様にせねばならぬ。ゴールの間のライン、及びフィールド内部のラインは、最も活動の激しい場所であるから、是非此等は危險なき石灰粉又は磨砂を用ふるのが安全でよい度々ラインを畫く面倒を避けようとして、フィールド内に小溝を堀つて之に代用するこ

とは最も危險であるから決してなすべき事ではない。

一旦フィールドの各區域や、しるしの位置を定めて後に、これ等の線などが消えてわからぬ樣になり、再び引く時に、此等の元標となるべき各交叉點は、成るべく永存的の危險のない目標を拵へて置くのが便利である。例へば棕櫚繩の一二尺位の切れ端等を折釘で各交叉點に留めて置くがさうする時はラインが消えても、再び測る面倒を避ける事が出來る。

第二節　競技者の人數と位置

競技者は片方十一人づゝで都合二十二人を要する。此の人數は前に述べた標準にあつたフィールドで行ふ場合に適當の人數であるから、競技者の躰格、フィールドの廣狹等に大なる差支あらば人數を增減しても不都合はない。

然し、正式のフットボール・ゲームは、フィールドに少々の廣狹がありても、此の

人數を增減して行はれた事は先づない。何れも片方十一人都合二十二人の制を採つて居る。是れ此の制が防ぐにも攻むるにも最も都合よく、面白く行はれるからである。此の人數では如何に陣立てをすればよいか、如何に攻めたならば最も有効であるか、如何に防いだならば最も得策であるか等の事は相應に研究もせられて居るから、此の制を採ると既に研究せられた事や經驗を應用する事も容易である。現に此の書物も十一人制を採つて述べたものであるから、非常に大なる不都合なき限りは此の制を採るのが最も適當であらうと思ふ。

此の人數て如何に配置して攻守の任に當るかといふに、競技者の役は大別して次の四種に分たれ、各特別の任務があるから簡單に說明する、

一、ゴール・キーパー　Goal-keeper.

人數は一人て、得點を爭ふゴール守護の任を負うてゐる。

二、フル・バック　Full-backs.

人數は二人て、ゴールの前方左右に居てゴール・キーパーを助け、ゴール守護の任に當る。

三、ハーフ・バック　Half-backs.

人數は三人て、フル・バックの前方に居て、攻めたり防いだりする。

四、フォーアワード　Forwards.

人數は五人て、最も前方に居て敵を攻めるのが主要な任務てある。尙、各員の位置及び名稱の詳細の事は、圖に示す通りてあるが、此の位置は必しも始終固守せねばならぬ事はない。攻勢を取る時は總べて前に進み、之に反して防禦につとむる時は總体が後に退く氣味となる。又時によつては少しづゝ前後に進退し左右に位置をかへる事も差支ない。只左に居るべき者が甚しく右に寄つたり、防禦の任にあるフル・バックがハーフ・バック、フォ

MISSING

も角も、大勢となる時は中々にむづかしいものである。

フットボール・ゲームは前にも述べた如く一方に十一人の競技者を要する團躰遊戯であつて、人數は少くない。從つて競技者は常に一致協力することをつとめねばならぬ。一致協力とは相互に信頼して各自が定まつた任務を盡すといふ事である。即ち自分の任務は何であるかといふ事を常に十分心掛けて置かねばならぬ。此の點は我國古來の撃劍柔道などの個人的競技と大にその趣を異にして居る。自分の任務を忘れて他人の範圍に立ち入り、却つて味方の競技者の邪魔をする樣なことは嚴禁しなければならぬ。兎角初めの間はボールにつきまはり、味方同士が三四人も一緒になつてごたごたする傾きがある。此等は全く自分の任務を忘却したもので、實際自分の團体の爲を思ひ、自分の任務を重んじたならば、かゝる醜態は如何にしても出來ない筈である。味方の競技者を信用し、常に全力を注

いてその任務を盡し、事に當つて決して躊躇してはならぬ。

十一人の競技者が、各よく自分の任務を重んじ、協力して前後左右の連絡を保つ時は、假令個人としての技術は敵に數等劣つて居ても、敵が眞の團體をなさない所謂烏合の衆であつた時には、容易に之を破ることが出來る。此の如き實例は著者の時々見聞する所である。

さて十一人の競技者の任務を大體からいへば次の通りである。

ゴール・キーパー　最後の防禦、
フル・バック　防禦、
ハーフ・バック　防禦及び攻撃、
フォーアワード　攻撃、

以下順を追うて各競技者の任務と之に伴ふ必要な條件とを述べよう。

(ロ)ゴール・キーパー

ゴール・キーパーは最後の防禦を任務として居るのであるから、之に伴ふ必要な條件としては先づ、

沈着、なることを要する。押し寄せて來る敵に怖れず、火急の場合に處してよく適當な處置をとる爲めには沈着でなくてはならぬ。

果斷、荒れ狂ふ敵を眼前に控へても、沈着にして果敢、毫も躊躇逡巡することなく、機宜に適する行動をとることは、よく此の果斷の性質がなくてはならぬ。

(ハ)フル・バック

フル・バックは前者と同じく專ら防禦だけてあるが、群り來る敵を追ひ拂ふのは此の役の要義てある。

強蹴、敵の來襲を能く味方の攻勢に轉じ、熱球よく敵の膽を寒からしめ、我が全軍の意氣を昂ぐるは實にフル・バックの此の強蹴によるもの

が多い。

機敏、強蹴の銳脚も敵のボールを奪ふ機敏を缺いたならば施すに餘地がない故、よく敏捷に立ちまはりて防禦の任務を遂行するにつとめねばならぬ。

(ニ)ハーフ・バック

ハーフ・バックはフル・バックと氣脈を通じて防禦の事に當り、一方ではフォーアワードを助けて攻撃の事にも與からねばならぬ多忙な任務といふべしてある。

疾走、攻守兩態に加はる此の任務のものは、尤も疾走に巧てなくてはならぬ。その理由はいふまでもない。且又飽くまで體力の强健なることを要する。

奪球、防禦の第一線は此のハーフ・バックであつて、殊にセンターは極めて

重要な役目てある。防禦の第一要義は敵の蹴るボールを奪ふことてある。奪つたボールを蹴つて前方の味方に渡すのは是れその第二の要義てある。

(ホ)フォーアワード

專ら攻撃に參加して敵中を疾驅奔走して味方は相互によく氣脈を通じて敵壘を衝くを任務とするが故に、その性質も他とは自ら異なる所が多い。

輕快、機敏快活、よく走りよく跳ふる輕快兒は尤も此の任に適する。

蹴渡すこと、敵壘に肉薄するが故に、敵の突撃を受ける事も多い。故に成るべく味方に蹴渡し、以て敵の銳鋒を挫き、攻撃の歩武を一歩でも進むることは重要な任務てある。

正蹴、殊にセンターは何處の味方から蹴渡して來るボールても巧みに

敵のゴールに正しく蹴込む事が最も必要てある。

(ヘ)キャプティン (Captain.)

凡そ團體を組織するからは、之を統御し指揮する權力を有する者が必要てある。フット・ボールに於て此の任務をもてるものをキャプティンといふのてある。キャプティンは十一人の競技者の中から選ぶのて、別に一人あるのてはない。キャプティンは常にその組全體の代表者となり、その命令には各競技者は常に服從する義務がある。此の故にキャプティンの責任の重大なのは勿論のことて、特に人格が高潔てあつて他の模範たるのみならず、又よく其組のものを明察して、全軍の意氣を總攬する能力を持つて居なければならぬ。競技等の場合、一切の交涉協議に關しては、キャプティンは常に自分の組を代表して滿足なる解決を與ふべき責任を有するものて、その組の名譽と、その組の發展とは、各競技者が夫々の任務を果すことが必要なのは勿論

てあるが、キャプティンその人の擧措よろしきに負ふところの多いことは云ふまてもない。

第四節　レフェリーとラインスマン

相爭ふ兩者の勝敗優劣は、是に關係なき第三者なる審判官が居て、判斷を下す。てある。故に總ての競技には、皆この第三者なる審判官が居て、判斷を下す。こゝに說くレフェリー Referee とは即ちフット・ボール競技の審判官てある。明細に見分け、冷靜に考へ、神聖な判斷を下す人てなければならぬ。フット・ボールに限らず何事ても、審判官となる人は實際にその技に堪能て、十分の經驗がなければ出來るものてはない。殊に競技者の眞に心服し尊敬してゐる人てなければ審判官としての資格の備はつた人とは言はれない。

ラインスマン Linesman とは恰もローンテニスのライン・テンパイヤのやうなもので、兩側のタッチ・ラインに一人づゝ要る。レフェリーを輔けてその判

斷に資するのである。但し審判の全權はレフェリーにある。

日常の練習にはレフェリーやライン・マンは要らぬ。殊にライン・マンは、重大な競技の外は必ずしも必要ではない。

第五節　ゲームに用ふる言葉の意味

ゲームをする際に用ふる語は隨分澤山あつて、且、日常あまり聞き慣れない語であるから、初めて此のゲームをする者には一々之を覺え込むといふ事は中々容易でないと思ふ。又之を一々日本の言葉に譯す事は一層困難の事であるといふのは、丁度之に適した日本の言葉が少いし、從つて譯語は或は新熟語となつて、その意味を說明しなければならない樣になり、却てむづかしくなる、且、又此のフットボールもローン・テニス、ベース・ボールの樣に世界的遊戲であるから用ふる言葉も成るべく一致して居る方が便利である。そこで著者は說明を要しない平易の語はその儘本書に用ひ

て居る、そして此等の言葉の中でゲーム中に尤も多く用ひ、且、重要なものだけを擧げてその意味を明にしようと思ふ。此等の語はゲームをなす時常に用ふるものであり、且、本書の後節に於て屢引用する語であるから、ゲームをする時は勿論、本書を通讀せらるる者は必ずその言葉を覺え、併せて言葉の意味を明かにして置く事は最も必要である。

本節では唯その語の意味を說明するに止まるので、その事柄が如何なる場合に起るか、又、それについてどんな規則や注意があるか等のことは、後節ゲームの規定等の節に詳しく述べる積りである。

一、ドリブリング Dribbling 走りながらボールを蹴運ぶことをいふ。

二、パッシング Passing 味方同士蹴渡すことを云ふ。

三、ヘッディング Heading 頭部でボールを受けるのをいふ。

四、フリー・キック Free kick レフェリーが指定したる點(地面の)にボールを置い

て、レフェリーの合圖と共に、競技者が任意の方向に蹴るのを云ふ。此の時、敵のものはレフェリーの合圖あるまでは、ボールのまはり三間以内に近寄ることは出來ない。

五、ペナルティキック Penalty kick ボールをペナルティ・キック・マークに置いて次の條件の下に、レフェリーの合圖により敵方に蹴るのを云ふ。

(イ) ペナルティ・キックをする競技者と敵のゴール・キーパー以外の競技者は、凡てレフェリーの合圖ある迄はペナルティ・エレア内に入らざること。

(ロ) ゴール・キーパーはレフェリーの合圖ある迄はゴール・ラインより前方に進まないこと。

六、ゴール・キック Goal kick ボールをゴール・エレアの中に置いてレフェリーの合圖によつて任意の方向に蹴るのを云ふ。

此の時はフリーキックと同じく敵はボールのまはり三間以内に近寄つ

てはならぬ。

七、コーナー・キック Corner kick ボールをコーナー・フラグの處の四分圓内に置き、レフェリーの合圖により、フィールド内に向つて蹴るのを云ふ。

此の時もフリー・キック、ゴール・キックの時と同じく、敵はボールのまはり三間以内に近寄つてはならぬ。

八、オフ・サイド Off side 競技者が次の樣な位置にある時はその競技者はオフ・サイドであるといふ。

(イ) ボールを蹴つて居るものと同じ組の競技者で、その者より尙ほ敵方に居て自分の前方(即ち自分と敵のゴール・ラインとの間)に敵が三人又はそれ以上居ない時自分はオフ・サイドである。

(ロ) タッチ・ラインを横ぎつてフィールド外に出たボールを投入する時、投入者と同じ組の競技者で、投入者よりも敵方に居て、その競技者と敵

のゴール・ラインとの間に敵が三人又はそれ以上居ない時、その競技者はオフ・サイドてある。

第四圖　コーナーキックの用意

九、アウト・オブ・プレー　Out of play之には二種ある。ボールがアウト・オブ・プレーてあること、及び競技者がアウト・オブ・プレーてあること是てある。

(イ)ボールがタッチ・ライン又はゴール・

ラインを横ぎつて、フィールド外に出てた時は、ボールがアウト・オブ・プレーに在りといふ。

フィールドは直に蹴ることは出來ない。ボールがゴール・ラインを横つて出た時はレフェリーの合圖により、ゴール・キック、或はコーナー・キックをし、若しタッチ・ラインを横つて出た時は、投入するのてある。

(如何なる場合にゴール・キックをし、コーナー・キックをするか、並に投入の仕方等の事は、後節ゲームの規定の内に詳しく記してある)。

(ロ)競技者がオフ・サイドにある場合に、その競技者はアウト・オブ・プレーてある。此時にはその競技者はボールに觸れてはならぬ。

一〇、ゴール Goal ボールがゴールの中に入つたのを云ふ。ゲームの勝敗はゴールの數によつて定まるのてある。

第六節　用具

(イ)ボール　附修繕

ボード・レースにボートが必要である様に、フット・ボールには此のボールは必要缺くべからざるものである。ボールの全體の形は勿論球形で、その大さは周圍二尺二寸乃至二尺三寸位、重さ百匁内外で運動器具店で五號又は六號と稱して賣つて居る位のものが、最も適當である。五號より小さくては余り輕過ぎて思ふ様に遠方に飛ばす事が出來ない。又六號よりも大きいと重過ぎて之を蹴るには中々力が要つて動作の敏活を缺く様な事になるから、競技者の體格等により、適當のものを用ふるがよい。

ボールには和製のものと舶來のものとあるが、何れを用ふるがよいかといふに、元より色々な事情により判斷しなければならぬが、單に良否得失を述べると、東京其他地方の都會の運動器具店で販賣して居るのは、普通

に和製であるが舶來のものに比較すると、材料の質も悪く又作り方にも色々缺點が多い。代價は四五圓位である。舶來のものは材料の質もよく、作り方も色々な點に十分注意して作つてある。只値段は和製のものに比べると高價で一個拾一二圓である。然し和製のものは値段の安い丈けに色々な缺點がある。一二を述ぶれば、革の裁ち方が極めて幼稚で丁度地球の子午線の様に、縫ひ上げてあるから膨らめた時は兩極に相當する部分が、強く引つ張られるから綻び易い。又縫ひ方も不完全で一所が綻び初めると、段々隣へ〳〵と綻びが伸びて行く恐れがある。その他、革袋の口のつけ方や危險な金具を打ちつけてあるなど中々缺點が多いが、舶來のものは此等の欠點はないから十分強く空氣を詰め込んで、活氣あるゲームをすることも出來、又和製のものに比較すると殆んど三倍も永く使用に堪へるから一見高價な様でも比較的安い。

ボールに損所を生じた時は、破綻の大きくならぬ前に、修繕を施す事を怠つてはならぬ。革袋に損所が出來た時は靴屋、又は然るべき革細工屋に命じて繕はしめ、決してゴム袋が破れ目から表はれた儘使用してはならぬ。若し、之が石、ガラスの破片、樹枝等に直接觸れる時は、ゴム袋をも損じ易く、一層面倒な修繕を要する事となる。ゴム袋の損じたのは素人の手で修繕の出來ない樣な大きな損じは、無論適當の商店に任さねばならぬが、商店は兎角多額の修繕料を貪るから、些細の損じは商店の手をからずに自分で修繕を加へるのが得策である。その方法は、先づ損所を檢し、別に使用に堪へないゴム袋から損所の大さより數倍大きなゴム片(損所が極めて小さな孔でもゴム片は少くとも直經一寸位に且つ成る可く圓く切る)を切り取り、磨研紙で袋の損所の周圍、及びゴム片の一面を磨いて、兩者の表面を粗雜にし、此面に自轉車のゴム輪修理用のゴム糊を塗り、兩面を合せて

十分間も强く壓して置けばよい。此のゴム糊は安價なもので、使用後口を密閉さへしておけば久しく使ふ事が出來るから、此の方法で修繕すれば至極輕便で又費用もかゝらぬ。

ボールは、成るべく、雨露にぬらされぬ樣にし、時々革袋には、馬油、又はクリーム(赤靴用)を塗つておけば、一層持ちがよい。

(ロ)空氣ポンプ及びヤットコ

此等の道具は、ボールに空氣を詰める爲めに用ふるのである。ボールは人間の呼氣でも詰められぬ事は無いが、餘り强く吹き込まうとすると肺を害したり、又傳染病の媒介をなす事があるなど、衞生上害がある。又人間の呼氣は、一般の空氣に比して溫いから、吹き込んだ時强く張り切つても、冷えるに從つて收縮してボールが柔くなる。且、人間の肺では十分かたく詰め込む事は到底出來ないから、空氣ポンプの力を借らなければならぬ。ポ

ンプにはフット・ポール專用のものとして別に作つたものもあるが、自轉車用のを代用することも出來る。

ボールに空氣を詰めるには、ゴム袋を革袋から出すことなく、只、管狀の口だけを出し、そのゴム管にポンプの管の尖端を挿入して空氣を送るのである。十分空氣が入つたならば、ゴム管の下部を細い麻紐で空氣の出ぬ樣緊縛し、更に管を折り曲げて重ね合せた上を再び緊縛すれば空氣の漏れ出る事はない、かうして後、ゴム袋の口を革袋の中に押し込み、蔽ひ革を正しくし革袋の口を更に革紐で閉づるのであるが、指先のみでは十分密閉する事が出來ないから、ヤットコの尖端は鑷(ヤスリ)を以て丸く削り、ゴム袋や革袋をつき破らぬ樣にして置けば安全である。

(ハ)グローヴ(手套)

ゴール・キーパーの用ふるもので、ゴール・キーパーはゴールを守る爲めに

手を用ふる必要があるが、熱球を受け留め、又は打ちかへす時に、素手では時に皮膚を傷つける樣な事が無いとも限らぬ。グローヴは此の危險を避ける爲めに用ふるので、革でつくり表面にギザ〳〵のある扁たいゴム片が掌と甲の中程から指の中の節のあたりまで貼りつけてある。之は受け留める時や打ちかへす時に滑べらなくて都合がよい。但し之はなくても餘り差支へは起らぬ。

(ニ)呼子笛

之はレフェリーがゲームの際、合圖の爲めに用ふるので、成るべく高音のものがよろしい。坊間に賣つて居る呼子笛でも可なりに間に合ふ。

第三編

第一節　ゲームの規定

(イ)ゲームの時間及び勝敗

一、ゲームの時間は九十分とする。

便宜上或は之よりも短く定めてゲームをやることもある。

二、時間の中央に別にハーフ・タイム五分を置く。

此の間はゲームを休む。次には兩組は位置を換へて始める。

三、ゲームの時間内に敵のゴールを得た度數の多き組を以て勝とする。

「ゴールを得らる」といふのはボールがゴールの中を通つたのをいふのである。然し敵が、投げ込んだり、たゝき込んだり、又は手で持つ樣な反則て入れたのはいけない。但し味方のものがやつたのはゴールを

得られたこととなる。

四、フリー・キックてゴールを得ることは出來ない。

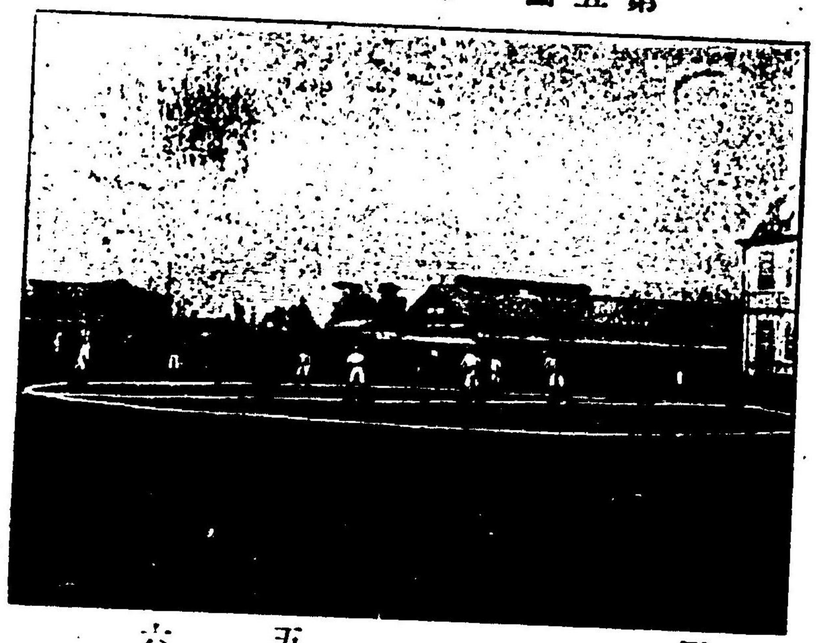
フリー・キックをなしたボールが誰にも觸れずにゴールに入つた時は點數の中に數へない。

(ロ)ゲームの開始

五、ゲームはレフェリーの合圖によつて始める。

六、最初「ゴール」の位置を選ぶこと」と「蹴始め」とは拳て定める。拳に勝つた組はその一方を任意に選ぶ。

第五圖　ゲームの開始



七、ボールをフィールドの中央に置いて蹴るのを以てゲームの始めとする。
蹴始めをする組のセンター・フォーアワードはボールを最初敵の方へ蹴る。若しさうしないと敵にフリー・キックをさせねばならぬ。
八、レフェリーが「始め」の合圖をなすまでは兩組共ハーフ・ウェー・ラインを越えて敵地に入ることが出來ない。又「蹴始め」をしない組のものはサークルの內に入ることを許さない。
九、ハーフ・タイムが終つて再びゲームを始める時は、最初蹴始めなかつた組から蹴始める。
十、何れの組でもゴールを得る毎にもとの位置にかへり、ボールをフィールドの中央に置き、つゞいてゲームを行ふ、此の場合にはゴールを得られた組から蹴始める。
十一、アウト・オブ・プレーてない時、レフェリーが必要あつてゲームの一時中

止を命じた後、再び始めるには中止を命じた點でレフェリーはボールを眞上に投げ上げる。
此の場合にはそのボールが地に落ちた時から再びゲームが始まるのであるから、地に達するまではボールに觸れてはならぬ。若し觸れると反則となり敵にフリー・キックをさせねばならぬ。

(ハ)ゲーム中の要件

十二、競技者は凡てフィールド內でボールに手を觸れることを許さない。
但しゴール・キーパーは此の限りてない。
十三、他の競技者を故意に蹴たり、衝いたり、又倒したりすることを許さぬ。
前二項の規定を犯した時は、敵にフリー・キックをさせねばならぬ。
尙、前二項の規定を自分の組のペナルティ・エレア內て犯した時は、敵にペナルティ・キックをさせねばならぬ。

ペナルティ・キックの場合には、ボールをペナルティ・キック・マークに置いて蹴るので、レフェリーの合圖あるまでは、防ぐ方のゴール・キーパーと蹴手との二人の外はペナルティ・エレア内に入ることを許さぬ。且、ゴール・キーパーは、レフェリーの合圖あるまでは、ゴール・ラインより進むことは出來ぬ。

十四、ボールがフィールドの外に出た時、レフェ

第六圖　投入の姿勢

リーは合圖をする。此の場合をさして、ボールがアウト・オブ・プレーにあり」といふ。

ボールがアウト・オブ・プレーにある時は一時ゲームを止める。

十五、ボールがゴール、コーナー・フラグに觸れ、又はフィールドの內でレフェリー、或はライン・マンに觸れても外に出てない時はボールはアウト・オブ・プレーにあるとは云はぬ。

十六、ボールをタッチ・ライン外に出した時は、敵はフィールド內に投入する。

投入者はボールがタッチ・ラインを橫切つた點に爪先を揃へ、フィールドに向つて立ち、ボールを兩手で頭の上から任意の方向へ投げ入れる。

此の時飛び上つてはならぬ。

投げ入れたボールに誰かが（敵でも味方でもよい）觸れるまでは投入者は之に觸れることは出來ぬ。

第七圖 投入

投入は、ハーフ・バックのウィングがする。投げ込み方を過つた時は敵はその點でフリー・キックをする。

十七、紅組の者がボールを蹴つて白組のゴール・ライン外に出した時(ゴールを通過せずに)は、白組はゴール・エレア内でゴール・キックをする。

(若しゴールに入れば假令味方が入れたのでも一點とられたことに

なる)ゴール・キックは通常、ボールをゴール・エレアの前の方の隅に置いてレフェリーの合圖で蹴る。

ゴール・キックは大抵、ゴール・キーパーがする。

十八、白組のものがボールに觸れて自分のゴール・ライン外に出した時(ゴールを通過せずに)は、ボールがゴール・ラインを横切つた點に近いコーナーから紅組がコーナー・キックをする。

コーナー・キックは通常、ハーフ・バックがレフェリーの合圖で蹴る。

但し此の蹴手は必ずしも定めない。

コーナー・キックはコーナーの印してある內ならば何處にボールを置いて蹴てもよい。

コーナー・キックの場合に、ボールを蹴るに便利な樣に、コーナー・フラグを取り去ることは出來ぬ。

以上の十六、十七、十八の三個條の中で、若し紅組の者がボールを蹴つて、それが白組の者に少しでも觸れてフィールドの外に出た場合には、やはり、白組の者が出したことになる。

十九、フリー・キックをなした時は他の競技者（敵でも味方でもよい）がボールに觸れるまでは再び之に觸れてはならぬ。ゴール・キック、ペナルティ・キック、コーナー・キックの場合も同樣である。

若し再び觸れた時には敵にフリー・キックをさせねばならぬ。

（二）ゴール・キーパーの特權

二十、ゴール・キーパーは味方のフィールド内（ハーフ・ウェー・ラインより自分のゴールの方）で、手を以てボールを受け、投げ、又は打つことが出來る。但しボールを持ち運んだ時は、その場處がペナルティ・エレアの外か、内かに

よつて、敵にフリー・キック、又はペナルティ・キックをさせねばならぬ。

廿一、ゴール・キーパーがボールを保持するか、或は敵を妨害するか、又はゴール・エレアを出た時の外は、敵は故意に之に觸れ、又はその視線を遮つてはならぬ。

若し之を犯した時は反則となり、敵にフリー・キックをさせねばならぬ。

廿二、ゲーム中、ゴール・キーパーは全じ組の者と交替することが出來る。但し、其の場合には豫めレフェリーに届けねばならぬ。

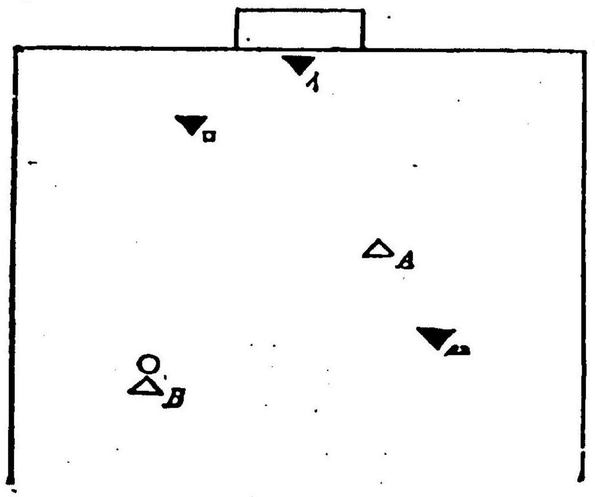
但書の事項を犯した時は、新たになつたゴール・キーパーがペナルティ・エレア内でボールに手を觸れた時は敵にペナルティ・キックをされる。

レフェリーに届ける迄はゴール・キーパーの特權がないからである。

（ホ）オフ・サイド

オフ・サイドはゲーム中、屢起つて誤られ易い事であるから、特にこゝ

第　八　圖



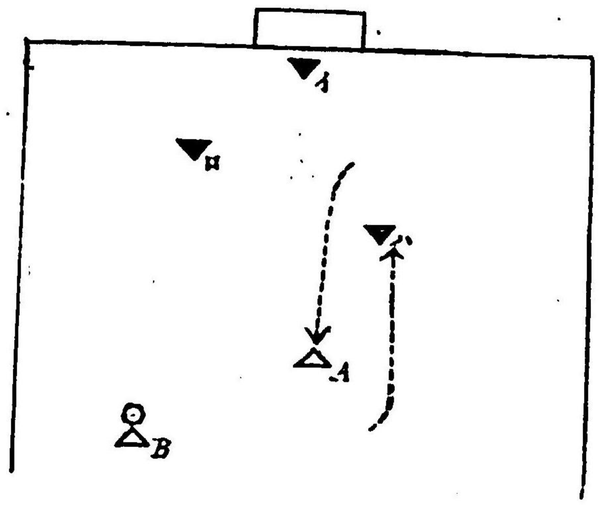
にて項を設けて之を説明するのである。

廿三、後方にある味方がボールを蹴る瞬間に自分より前方に敵が三人以上居ない時は、そのボールに觸れることが出來ない。此の場合に自分の位置をオフ・サイドといふ。

但しボールが前方から來た場合には、その敵よりと味方よりとを問はず、決してオフ・サイドとなることはない。

例へば第八圖黒組のゴールに近づいた場合に於いて、白組の(A)は後方にある味方(B)がボールを蹴る瞬間には、(A)の前方に黒組の(イ)と(ロ)との

第　九　圖

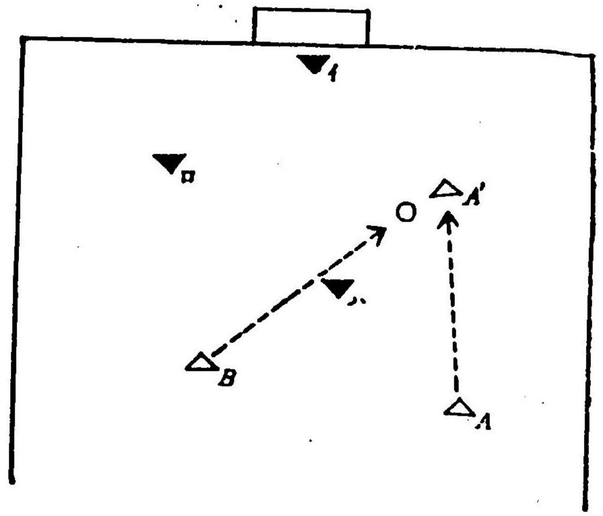


二人しか居ない故に(A)は此場合にオフ・サイドにありといふのである。

又第八圖に述べた瞬間にオフ・サイドであつた(A)は第九圖の如く退いても(B)の觸れたボールに他の者が觸れるまでは(A)の前方に黒組の者が幾人來ても尚ほ依然として(A)はオフ・サイドである。

又第十圖に於いて白組の(A)は同じ白組の(B)がボールを蹴つてから(A')の位置に進んだとすれば、前には敵は二人しか居ないけれどもオフ・サイドではない。何故ならば(B)がボールを蹴つた瞬間には(A)はオフ・サイ

第十圖



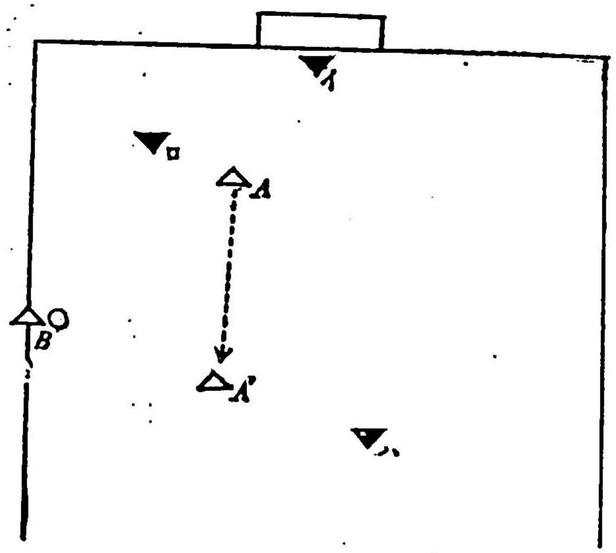
尙此の場合に他の競技者がボールに觸れた瞬間に、又(A)(B)其の他のものがオフ・サイドの位置にあるか否かが決するのである。

廿四、オフ・サイドは競技者がボールに觸れたる瞬間に起るもので位置の變動如何に關せず次に競技者がボールに觸るゝ瞬間まで繼續する。

廿三、オフ・サイドの位置に居なかつたからである。

此故にオフ・サイドは、白組の(B)がボールを蹴る瞬間に於ける(A)の位置を云ふので、(A)が(B)から來たボールに觸れる時の位置を云ふのでないことが分るであらう。

第十一圖



廿五、タッチ・ラインよりボールを投入する場合に、投手と仝じ組の者がそれより敵方にある時は、ろの人より前方に敵が三人以上ゐなければオフ・サイドとなる。此の場合に若し敵か二人以下の時はその人はオフ・サイドになる。但し此の場合に投手より味方の方にある者は決してオフ・サイドとなることはない。

又投げ込む時投手は決してオフ・サイドとなることはない。

第十一圖の黒組のゴール・ラインの近くて白組が投入の場合に白組の(A)はオフ・サイドである。何故

ならば、投入者(B)より敵方に居つて、前方には敵は(イ)(ロ)の二人しか居ないからである。然るに若し、(B)が投入の場合に、(A)が(A′)の所に居たとすれば、(A′)より前方にはやはり敵は(イ)(ロ)の二人しか居ないけれども、(A′)はオフ・サイドではない何故ならば(A′)は投手(B)よりも味方の方に居るからである。

廿六、オフ・サイドにあるものは次の事をしてはならぬ。

1. ボールに觸れること、
2. 敵を妨害すること、
3. 敵の視線を遮ぎること、

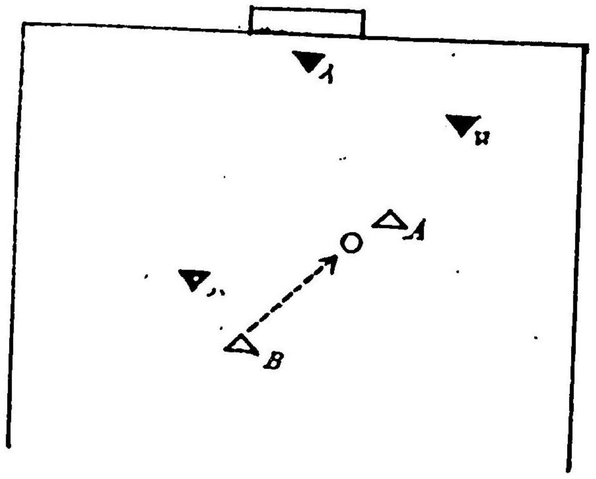
若し之を故意に犯した時は勿論、假令過つて犯しても同様に反則となる。

若し此の反則をなした時はその點に於いて敵にフリー・キックをせら

れる。

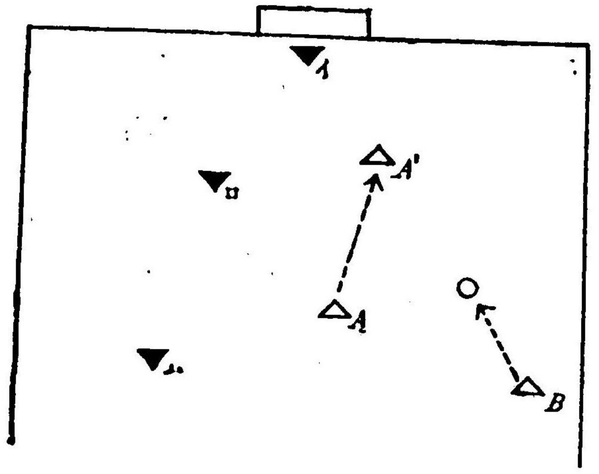
第十二圖に示す所の白組の(A)はオフ・サイドであるから、よしや(B)からボールが來ても(A)は之に觸れることが出來ないのみならず、黒組の(ロ)其の他のものを妨げたり、その視線を遮つたりしてはならぬからその位置を避けねばならぬ。

第十二圖



第十三圖に示す所の白組の(A)も亦オフ・サイドであるから、(B)から來るボールの前に進んで、黒組の(イ)の視線を遮る爲めに(A′)の位置に行つたとすれば明かに反則である。此の場合にはボールを(A′)の位

第三十圖



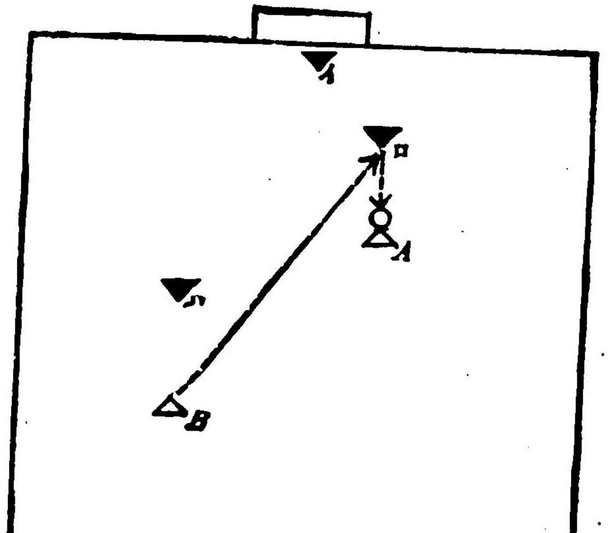
場合を示す圖で、白組の(A)は全じ白組の(B)が蹴つたボールを黒組の(ロ)が蹴返したとすれば、その置に置いて黒組にフリー・キックをさせねばならぬ。

廿七、次の場合には如何なる位置にあつてもオフ・サイドとなることはない。

1. コーナー・キックの時、
2. 敵のゴール・キックの時、
3. 敵がボールに觸れた時、
4. 自分よりも敵方に在る味方がオフ・サイドでない時、

第十四圖以下第十八圖までは、(3)のサイドとなるが、ボールが黒組はオフ・サイドの位置に居るにも拘はらず、はオフ・サイドではなくなることは前にも述べた通りである。若し再

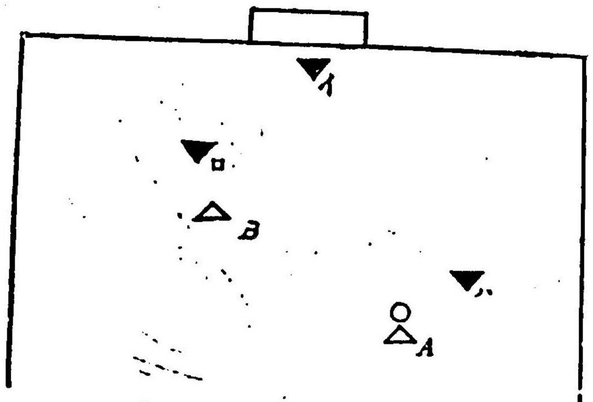
第四十圖



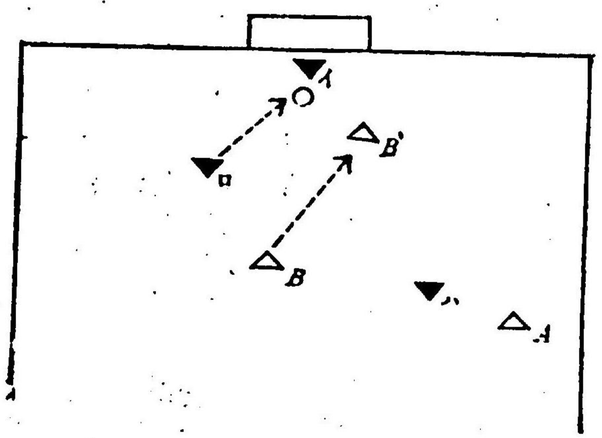
瞬間から(A)はオフサイドではなくなる。それ故に無論ボールに觸れることが出來る從つてどこまでも續いて進むことも出來るのである。然しこの場合に味方の者に渡さうとするとオフ・サイドになり易いから注意せねばならぬ。

黒組の(ロ)は退き白組の(B)は進んで第十五圖の如くなると、ボールが白組の者に觸れた瞬間から(B)はオフ・サイドとなるが、ボールが黒組の者にふれると直ぐ同じ位置でも(B)

第五十圖

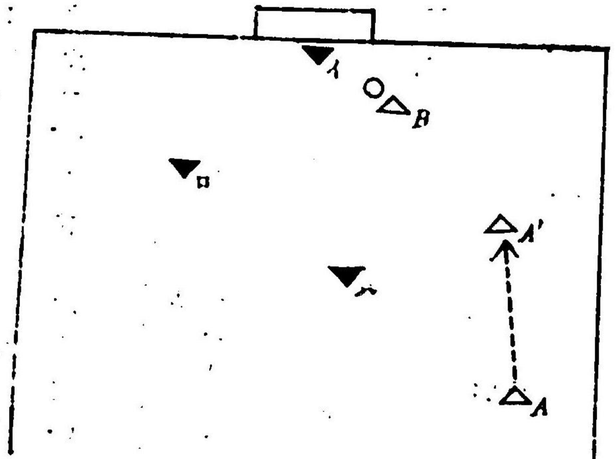


第六十圖



び白組のものが觸れると(B)は復たオフ・サイドとなり黒組に觸れると復た(B)はオフ・サイドてなくなる。故に第十六圖の如く(B)は進んで、(B')に行つてもオフ・サイドてはない。(ロ)がボールを蹴損なつて(イ)に觸れても(B')は依然オフ・サイドてはなく(A)も無論オフ・サイドてはない。白組の(B)がボールに觸れた瞬間に仝じ組の(A)が(A')に行つて居るとすれば前方には敵が二人しか居なくて(第十七圖)一寸オフ・サイドの樣に思はれるが、さうてはない。オフ・サイドは後方にある味方がボールに觸れる時、前方にある味方に限つて起こるものてあるからである。(二十三、參照)

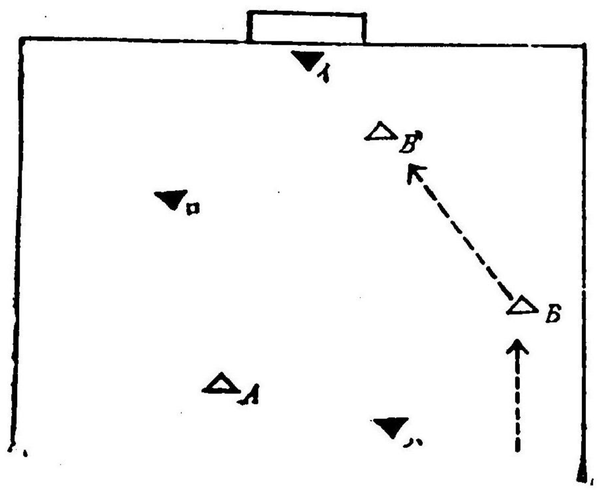
第七十圖



廿八、オフ・サイドてない位置から、自分て

ボールを運んで進んで行つた時は、前方に敵三人以上居らずともその人はオフ・サイドとならない。

第十八圖



第十八圖は之を説明する圖であつて、初め白組の(B)はオフ・サイドでない位置から自分でボールを蹴つて進んで來たのであるから、今の位置はオフ・サイドの樣であつても此の場合にはさうではない。尙進んで(B')に行つても全樣である。

附言、(イ)オフ・サイドの位置にある時は、「人がアウト・オブ・プレーにあり」といふのて、十四、ボールがアウト・オブ・プレ

ーにあるのに對して用ふる語てある。

(ロ)オフ・サイドになるのは一人と限つた譯ではない。幾人でも全時になることがある。唯說明の便宜上、簡單な例を以て示したのてある。

(ハ)オフ・サイドは誰かがボールに觸れた瞬間に起るのてある。之を見分けることは中々困難てあるから各自が常に注意して之を避ける樣につとめねばならぬ。

審判上の注意

審判の任にあたる人をレフェリーといふ。レフェリーは一人て、二人おくことはない。レフェリーの外に、ボールのアウト・オブ・プレーを判別する事を任とし、ボールがフィールドから出た時に、何處を通つて出たか、何れの組が出したかを、專門として判別する、ラインス・マンといふのが二人ある。ラインス・

マンは恰もローンテニスのライン・アンパイヤの様なものである。レフェリーに意見を述べる事は出來るけれども、その判斷に異議を唱へる事は出來ぬ。レフェリーはフィールドの中を走り廻つて審判をするが、ライン・マンはフィールドの中には入らず、タッチラインに沿うて往き來する。レフェリーは時計と合圖用の笛とを用意し、ライン・マンは三尺許りの旗竿の小旗を以つて居る。

審判者は要するに規則通りにゲームを行はせ、勝敗を正しく判定するだけの事である故にゲームの規則には最も精通して居なければならぬ。以下レフェリーとしての色々の注意を記して見よう。

ゴールの位置の選擇と蹴始めレフェリーはゲームを始める前に、各組のキャプテインをしてゲームの時間を極めさせる。普通一時間半の場合が多い。次に擧て「ゴールの位置」と「蹴始め」との何れかを擇ばせる。兩組のキャプテ

インに擧をさせて、勝つた方に、ゴールの位置を選ぶか蹴始めをするか、どちらかを勝手に選ばせ、蹴始めを選んだら他の組は當然位置を選ぶ又若しる時などは蹴始めよりも位置を選んだ方がよいが風がない時は位置はどちらても大した利害はないから、蹴始めをした方が利益がある。故にこれは愼重に考へる必要がある。ゲームの時間と、各組の位置と、蹴始めの組がと決定したら、各競技者をしてそれぞれ各自の位置に着かせる。蹴始めるる組のフォーアワードはフィールドの眞中の圓の中に入る事が出來る。敵は入る事が出來ないから成るべく近く圓を取り卷く。蹴始めの笛を鳴らすまでは、各組共ハーフ・ウェー・ラインを越して敵の方に入る事はゆるさぬ。兩組共それ〳〵各自の位置に就いて準備が出來たら、先づ用意」の號令をかけ、次て蹴始めの合圖として笛をならす。

蹴始めの人は、ボールをハーフ・ウェー・ラインから向うへ蹴らなければならぬ。續けて二度蹴つてはならぬ。他の人に渡す。次にそのボールを受けて蹴る人は、どちらへ蹴つても又續けて幾度蹴つても勝手である。最初に蹴る人が若し誤つて、ハーフ・ウェー・ラインから後に蹴るか、又は續けて二度蹴ると反則であるレフェリーは直に笛を吹く。次に反則した組の敵の者にその場所でフリー・キックをさせる。

フリー・キック　フリー・キックをさせる時には、敵(反則した組)を三間以内に近寄らせてはならぬ。フリー・キックをする人が續けて二度蹴つてならぬことは、前の蹴始めの時と同樣である。フリー・キックをさせる時には用意の號令は要らぬ。兩組の者が適宜の位置に就いたと思ふ時に笛を鳴らすのである。この時まゝオフ・サイドになる者があるから注意が要る。

ラインス・マン　ボールがタッチ・ラインから出たら、ラインス・マンは常には

下げて居る旗を振り上げて合圖をし、タッチ・ライン上の、ボールが横切つた點に立ち、紅とか白とか投込む組に命ずる。(ラインス・マンは出たボールを取つて來る事はいらぬ事である。投げ込む者が取つて來る。)ラインス・マンはこの外に用事はない。故に重大なマッチでもなければラインス・マンはなくともよろしい。

投げ込み　投け込む時にも笛を吹く。レフェリーは投入者の姿勢に注意せねばならぬ。投け込む時に正しくライン上に兩足をつけて居るか否かをよく注意する。若し飛びあがつた時は、敵の組にフリーキックをさせる。投げ込む時に其組の者がオフ・サイドになる事があるから、注意せねばならぬ。

ゴール・キックとコーナー・キック　ボールがゴール・ラインから出る時は、殊によく注意して、ゴール・キックかコーナー・キックかを極めなければならぬ。ゴール・キックかコーナー・キックかは、兩組の利害に大に關係するからである。ゴー

ル・キックかコーナー・キックかをなす場合にはオフ・サイドといふ事はない。コーナー・キックの時には、たとひコーナー・フラグが邪魔になつても拔く事はならぬ。レフェリーはそのコーナーからゴールを隔てゝ向う側にゴール・ラインの上に立つて居るがよろしい。さうすれば蹴つたボールが最もよく見分けられる。コーナー・キックをしたボールは、空中で一旦ゴール・ラインから外に出て、風や其他の理由でカーブして、落ちる頃には再びフィールドの中に入る事が時としてあるが、此様な場合には、たとひフィールドの中に落ちても、空中で一旦外に出たのであるから敵にゴール・キックをさせる。

ハーフ・タイム ハーフ・タイムは普通五分間である。特別の事情のない限りは伸縮しないがよろしい。たとひゴールの前で今にも入りさうな形勢であつても、ハーフ・タイムになれば笛を吹いて、きちんと中止を命じなければならぬ。

ハーフ・タイム後 ハーフ・タイムの後に始める時は、兩組の位置を換へ、ゲームの最切に蹴始めをしなかつた組から蹴始める。蹴始めの時の注意は、前に述べたと同様である。

得點後の蹴始め 右に述べたやうに、ハーフ・タイム後に蹴始めるのは、ゲームの最初に蹴始めなかつた組であるが、ゲームの中途で何れの組かが敵のゴールを得て、次に蹴始めをする時はゴールを取られた組から蹴始めるのである。是には特

第十九圖 反則の例

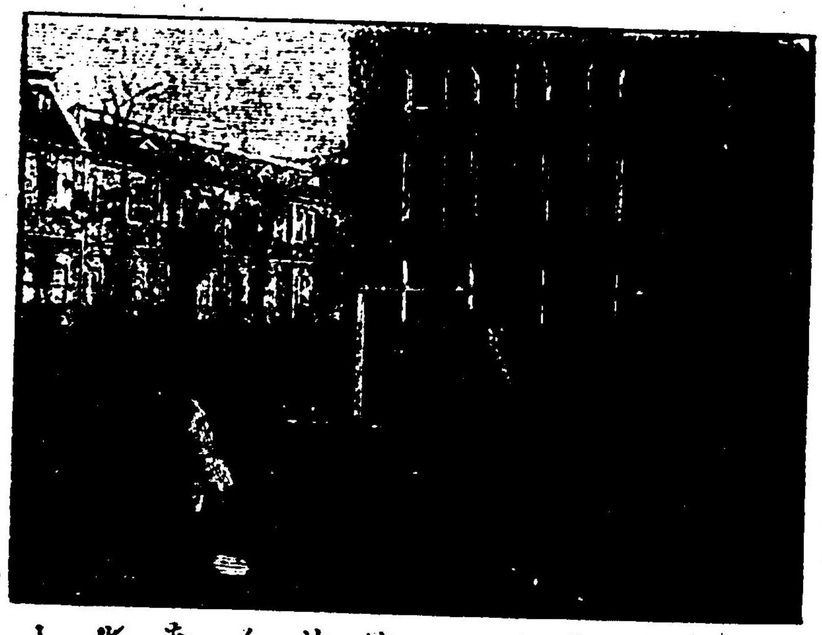
に注意してハーフ・タイム・後の蹴始めと混同してはならぬ。

第二十圖　白組の反則

●反則●　ゲーム中ボールに手でさはり、又敵を手で押したり引張つたりする者が、初歩の者には間々あるから、此様な反則をした場合には嚴重にきつぱりと判定して、フリー・キックをさせるやうにしなければならぬ。

●ペナルティ・キック●　ペナ

第二十一圖　ペナルティ・キックゴール・キーパーの奮戰



ルティ・キックの場合には、必ず競技者をペナルティ・エレアの外に出さなければならぬ。ペナルティ・キックをする人は、勿論其内に入つて居てよろしい。ゴール・キーパーはゴール・ラインより前に進んで居てはならぬ。將にペナルティ・キックをせんとして居る時に、ゲームのタイムが盡きたといふ様な場合があつた時は、時間を延長してペナルティ・キックだけをさせる。コーナー・キックの場合も亦同様である。

必要あつて一時ゲームを中止する場合　競技者又はレフェリー自身に何か故障が起つた場合、或はその他、何かの要事が生じた場合にはレフェリーは一時ゲームの中止を命ずる爲めに笛を鳴らす。かくて再びゲームを始めるには、その中止を命じた位置でレフェリー自らボールを眞上に投げ上げる。而してボールが落ちて地に着くと同時に再びゲームを始める。此の場合には別に笛をならさぬ。若し地に落ちない内にボールにさはる者があつたら即ちその人は反則てある。そして敵にフリー・キックをさせねばならぬ。

笛の意義　レフェリーは一切笛て合圖するのてあつて、蹴始め、中止、反則、フリー・キック、ゴール・キック、コーナー・キック、ペナルティ・キック、投げ込み、ゴール（ゴールに入る事をいふ）等、すべてゲームの進行中之を止める時、及びやめて居て又始める時は、皆笛て合圖する。故にゲーム中笛が聞えたら競技者は必ず

直ちにゲームを止める。又止めて居る時に笛が鳴つたら直ちに始める合圖てある。

ボールがレフェリー等に觸れたる場合　先きにレフェリーはあまりボールに遠ざかつては宜しくないと、注意しておいたが、それかと言つて餘りボールに近づいて、爲めに競技者の邪魔をするやうな事があつてはならぬ。若しボールが飛んて來て避ける暇がなく、體にあたつたとしても依然ゲームを續ける。決してやめない。又ゴールやコーナー・フラグにあたつても、フィールドの外に出ない限りは、やめずに續けて行ふ。

ゴール　ボールがゴールに入る（之を單に「ゴール」といふ）とは、ゴールとゴール・ラインとの間の想像の垂直面を全然ボールが通過してしまふのをいふのてある。若し少してもそのてはない、タッチ・ラインから出る等の場合も同樣てある。

レフェリーの絶對的權力　レフェリの審判は常に絶對的であつて、その審判に對しては何人も決して容喙することを許さぬ。

第四編

第一節　ゲームの例

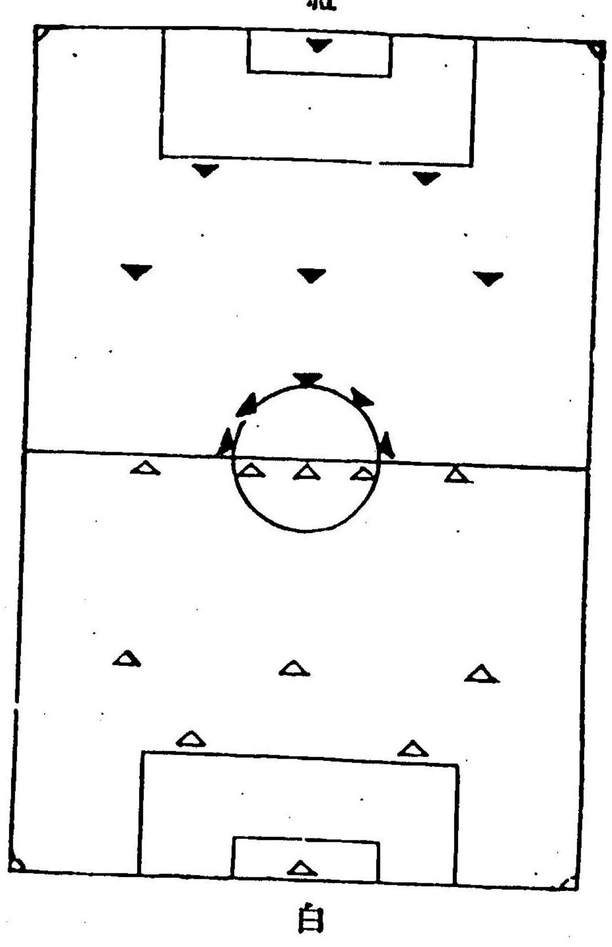
フットボール・ゲームは實地にやつて居る所を見なければ、十分に了解する事はむづかしい。單に此の書物に前から述べた事を讀むだけでは明らかに會得することは至極困難であらう。書物を讀み實際をも見て、又書物に照らし合はせるといふ樣に、書物上の記載と實地と兩々相待つて初めて完全に了解する事が出來るのであるから、出來得るならば實際に競技して居る活きた例を見るのが一番効力が多い。

此點を考へて成るべくゲームの實際の觀念を明かにする爲めに此處にゲームの例をあげた次第であるが、之とても筆のさきで記す事であるから迚も實地を見る樣には行かないが、兎に角、大體の有樣だけは想像が出

來ようかとおもふ。

先づキャプテインは競技するに先つて各競技者の長所短所を考へて配置を定める。此事は責任のある又至極むづかしい仕事で、キャプテインは日常に練習してをる時にも又競技する時にも各競技者の擧動に充分注意してその力量を考へ、適材を適所に置き、尤も有効なる配置によつて強力なるティームを作ることに心懸けて居らねばならぬ。各競技者は又キャプテインの命じた任地に就かねばならぬ。たとひ自分は不適當と思つても我儘をいつて變更を迫るが如き事は出來ぬ。全力を擧げて其の任を盡さねばならぬ。さて愈〻配置も定まり凡ての準備が出來、對抗する組も用意が整つたらば、双方のキャプテインは豫め競技時間を定めてレフェリーに通告し、つぎに拳をし勝つた方のキャプテインは自分の好む方の陣地をとるか、又は敵に先ちて蹴始むるかの何れかを選む權利がある。之は前にも述べた通

第二十二圖



り、我が紅軍のキャプテインは幸に拳に勝つて二者何れかを選ぶ事を得るに至つた。折柄少〻の北風があるので風に面して戰ふ事の不利を察して北の陣地をとつた。敵白軍は、陣地を南にとるの不利を被つたが、一方に蹴始めの利益を得ることゝなつた。こゝに兩軍は上圖に示すが如く最初の陣形によつてレフェリーの合圖を

今やおそしと待つてゐる。競技の初めに置ける陣立は圖にも示す通り、攻勢をとるものと守勢をとるものとて少しく相違がある。即ち攻勢の方ではフォーアワードの内側の三人はサークル内に入り、その中センターは合圖と共に直ちに蹴得る用意をし、左右のインナーはセンターの蹴出したボールを直ちに受取り得る樣兩側から接近して位置をとる。餘りセンターに遠ざかつて居てはボールを敵に取らるゝ恐れがある。左右のアウトサイドの兩人は直にタッチ・ラインに沿うて敵地に深く進入する樣位置するがよい。

守勢をとる方即ち我が紅軍は、フォーアワードの五人がサークルを圍んで敵の蹴出したボールを逸早く奪ひ取らうと勉める。但し此の場合に合圖ある迄は紅軍は一歩もサークル内に入るを許されない事は既に規定の所で述べた通りである。その他ハーフ・バック、フル・バックの位置は攻守兩勢

共別に相違はない。

一聲高くフィールドに響いたレフェリーの合圖と共に白軍のセンターは逸早くボールを間近のインナー・ライトに渡した。我が紅軍のフォーアワードも合圖諸共、サークル内に進入してボールを奪ひ取らうとしたが白軍のインナー・ライトは突進せる我がフォーアワードの鋭鋒を避けて、既に前に進める味方のアウトサイド・レフトに逸はやくパスした。然るに我が紅軍ライトのハーフ・バックは機敏にボールを奪つて快速なる味方のアウトサイド・ライトのフォーアワードに渡した。ボールは瞬くひまに白のコーナー近く迄運ばれる。我が紅軍のフォーアワードは何れもゴール間近に進んで、パスを待ち構へて居る。

此の危機に臨んで白軍のレフト・フル・バックは猶豫することなく進んで、そのボールを奪ひ一瞬の隙を偸んで全身の力を込め、前方己れの組のフォー

アワードに送つたので、忽に攻守勢をかへ、白軍のフォーアワードは巧みに連絡してわがゴール近く攻め寄せた。我がフル・バック、ハーフ・バック、こは一大事とボール目がけて突きすゝむ。白軍もさるもの、直にボールをアウトサイド・ライトに渡して我が鋭鋒を避けた。ボールを得た白軍のアウトサイド・ライト、我れを成るべく引きつけ機を見てセンターにパッスせんとし、我れに妨げられて互に爭ふ内、過つてボールをゴール・ライン外に出した。

直にレフェリーの笛はなつて吾れのゴール・キックを宣告せられたので、我がフル・バックはボールを取り來り、ゴール・エレア内、適當の場所に置いた。再び笛は響いてゴール・キーパーは眞正面に蹴るの不利にして危險なるを察してアウト・サイド・レフトのフォーアワードに向つて蹴放つた。我アウトサイド・レフトよく之を得てタッチ・ラインに沿うて運ぶと、敵のハーフ・バック直に進み來つて妨害を加へ、我は之を避けて進まんとし過つてボールをタッチ・

ラインの外へ出した。笛は又響く、白軍のライト・ハーフ・バックはボールが出たライン上に規定の姿勢を取つて投げんとたしが、敵にボールを取られさうてあるから、間近の味方に投げる眞似して稍遠いセンター・ハーフ・バックに投げた。ボールはそれよりアウトサイド・ライトに送られんとして、遂に我が紅軍のレフト・ハーフ・バックに奪はれ、巧みに受けつ渡しつ、敵をさけ、俄に我は白軍を壓迫して更にアウトサイド・ライトに送られ今やゴールを得んとして居る。白軍のハーフ・バック、フル・バックすかさず駈けつけて實に一大混戰の有樣となつた、一聲高く笛は響いた。敵白軍の一人は彼れのペナルティ・エレア内に於いて手をボールに觸れた爲め我にペナルティ・キックを與へざるを得ない仕儀となつたのである。

敵味方は皆ペナルティ・エレアの外に出た。只單身防禦の大任を負うた白のゴール・キーパーは、悠々自若としてゴールに立ち、我が紅軍に於ては、キック

の最も正確なりとの評あるセンター・フォーアワードは、ペナルティ・キック・マークの上に置いてあるボールの側にゴールを狙ひつゝ、合圖おそしと意氣込んでゐる。エレアの外の兩組の勇士は手に〳〵汗を握つて笛ならば吾れ飛び入りて防がん、攻めんと身構ふ樣は一種悲壯の光景を呈して居る。兩軍の用意よしと見てレフェリーが合圖すると共に活動は初まつた。我がセンター・フォーアワードはゴールを目懸けて蹴放つ。紅白の面々は攻めんとし防がんとしてエレアに進入した。ボールはゴール・ポストにあたつて跳ねかへつた。我が紅軍の無念、白軍の喜悦思ふべしてある。跳ねかへつたボールを白のフル・バック早くもとつて前方に蹴放つた。ボールは又〻敵のフォーアワードのものとなつて驀に攻め來る。我がハーフ・バックの一人こは大事と横合より電光の如く走りよる。敵は之れまてと、ゴール目がけて蹴放つた。狙ひたしかな熱球、飛んでゴールに入つたと思ふと我がゴー

ル・キーパーもさるもの、飛び上つたとおもふ間によく之を捕へ、遠く之を味方に蹴渡した。我がフォーアワードよく之を得て、互に渡しつ受けつ群がる敵の間を縫ふが如くに進む。敵の之を防がんとゴールの前に集まれるを見てとつた我が前軍は遠く之をアウトサイド・ライトに渡した。更にセンターにパスしようと蹴つたが白軍のフル・バック逸早く奮進して、之を受けかへさんとし誤つて自分のゴール・ライン外に逸した。レフェリーの笛は高く鳴つた。

こゝに敵は我をしてコーナー・キックをせしむるの已むなきに至つた。我が紅軍のライト・ハーフ・バックはコーナー・キックに妙を得たる勇士、レフェリーの合圖諸共、ボールは強からず、弱からず、又高かちず低からず中空を飛んでゴールの前に落ちんとする。我が紅軍のフォーアワードの脊高き一人、頭をひねりヘッディングによつてゴールを得ようとする。ボールはゴール・キー

バーの銃拳によつて見事に打ち返へされた。好き折りあれと待ち構へた
る我が紅軍のセンター、電光石火と蹴放つた得意の熱球、ゴールの上隅に
網もさけよと飛び込んだ。レフェリーの笛は一きは強く勇ましくフィールド
に響き渡つた。

こゝに我が紅軍は一點を收め得たのである。

ハーフ・タームにはまだ時間がある。直ちに元の位置につき、再びゲームを
續ける。

初めにかへつてゲームは續行せられた。蹴始めは再び白軍から。

今一點を取られた白軍、無念やる方なく右に左に連絡自在、勝に乘じたる
我が紅軍をよく牽制してその鋭鋒を左方に集中した。蓋し我れの右翼が
比較的弱味あるのをつけこんだのである。

紅白兩軍の接戰愈〻面白くなつた、ボールの動き、競技者のあへぎ一きは劇

第二十三圖　拙劣なるゲーム

しくなつて來た。高いボールはバウンドの處理に困難であるからてあらう、時々に高く試みられたが敵もさるもの善く防いで更にを功をなさない。我が紅軍のフル・バックの強蹴はタッチ・ラインからボールを出した。アウト・オブ・プレーを宣せらしれて次て白のハーフ・バックそこに立つて投入した。

接戰益〻劇しく混亂の體を示した時、我がキャプティンは部下に下知して、徒らに混戰をするの不利を

諭した。

勢を得たる白軍、巧みに我が虚を衝かうとする、我がフル・バックよく之を看破して不意の來襲に備へて居る。

程もなく高きレフェリーの笛はハーフ・タイムの合圖、白軍の急撃空しく、玆に小憩を宣告せられた。

直に係員の齎らせる用意のレモン一片づゝは、かわける口を十分にうるほして元氣全く恢復の思がする。此の間に兩軍の位置は變更せられた。五分を經て用意の宣告あり、蹴初めは紅軍から。

互に意氣込む兩軍の勇士、程もなくまた奮戰劇鬪、前にもまさるはげしさ、共によく守りよく防ぐ。

敵は絶えず我が右翼を狙ふ之に鑑みて我は既にハーフタイム中、ライト・ハーフ・バックを進めインナー・ライト・フォーアワードを退けて、その位置を換

はらしめ、以て防備を嚴にした。されど敏捷なる白軍のアウトサイド・レフト・フォーアワードは巧みに攻撃し屢〻奇功を奏するのに加へてインナー・レフト之に合し、益〻猛烈を加へて來つた。我がセンター・ハーフ・バック防がうとして後ろから放らに敵の一人を衝いた。之は明かに反則である。レフェリーの笛はなり、こゝにフリー・キックを敵白軍にさせるに至つた。紅軍今や銷沈の態、奮へや紅軍怖れず進め、と心におもふ甲斐もなく勢に乘ぜる敵軍、益〻奮迅の有樣、我が紅軍のフル・バック、ゴール・キーパーよくつとむと雖も大勢を挽回する機を逸し、あはれや將に壓迫せられ、白軍の勢甚だ盛にその鋭鋒到底當るべからずと見えたが、こゝにセンター・ハーフ・バックにその人ありと知られた勇士、獅子奮迅の勢を以て銕脚を奮うて、一蹴よくボールをハーフ・ウェー・ラインまで蹴返した。

此の壯擧によつて愁眉を開いた我が紅軍、意氣頓に昂り、キャプティンの與

ふる突差の指揮、先づライトにボールを送り、敵のコーナーに近づいて、白軍の全力をこゝに牽制し、機を見て、巧みにパッスすれば、兼ねて待ち構へしセンター得たりと受け止め、敏捷なる左脚の一蹴、砂を捲いて熱球遂にゴールに入つた。紅軍萬歳凱歌またあがる。

白軍の此の失敗は誠に瞬時の油斷による。嗚呼油斷、戒むべきは油斷なるかなである。

かくて再びゲームは初めに戻つて續けられた。再度敗れたる白軍、遺恨此上なく、死物狂ひの奮迅、短兵急に屢〻我がゴールを襲ふけれども、單身で來る故に我が軍よく之を防ぐ事が出來、何の怖るゝこともなかつたが流石は白軍のキャプティンよく軍を收めて整々の陣形とかへ、更に一層猛烈なる一齊進軍、右に左に更に亂れざる隊形は全く別軍の如くなつた。我が紅軍少しく色めく、得たりと奮ふ白軍、アウトサイド・ライド・フォーアワードよく

第二十四圖　反則の例

我がレフト・ハーフ・バックを拔いて來る。フル・バックつゞいて出たが遂に滑つて倒れた。悔しまぎれにその足先きで敵の足を引つかけて倒した。笛はなつた。遂に又々敵にフリー・キックをせられるに至つたのである。

勇み立てる白軍のフォーアワード互によく連合しよく働く。インナー・ライト、ボールを翻弄す。蓋し紅軍を一方に牽制しようとしたのである。ボールは早くもインナー・レフトにパッスせられた。我がゴール・キーパーの狼狽を見すま

した敵のレフトは、機敏にボールを受け止め、迅速にゴールに蹴つた。狙は違はずゴールの一隅を衝いて我は遂に一點を取り返されたのである。白軍の意氣俄かに昂る。三度びゲームは續行せられ、紅白兩軍の勢共に猛烈、力戰激鬪、未だ數分をも過ぎないのに笛は高く響いた。定刻は來たのである。

兩軍中央に集まる。我が紅軍のキャプティン先づ白軍の萬歳を三唱し吾等一同之に和す、白軍のキャプティン續いて我が紅軍の萬歳を三唱して同軍之に和した。かくてゲームは紅軍二點に對する白軍一點を以て紅軍の勝に歸し無事に終局を告げたのである。

第二節　ゲーム以外の練習

始めての人、全く經驗のない人には、先づどういふ事から始めたらよいか、ゲームをする準備としてはどんな練習が必要かといふに、此準備練習にも色々あるが、初步の人に最も有效な練習、假に基本練習といはうが、それ

が一つ、その外に環になつてやるパスの練習、獨りてボールを蹴つて運ぶドリブリング、二三人並んでドリブリングしつゝパスをやる練習、ゴールのある處では、一人をゴール・キーパーにしてゴールに蹴込む練習、コーナー、キックの練習などがある。今此等に就いて詳しく述べよう。

(一)　基本練習

始めての人には高く蹴上げる事が最も興味がある。ローン・テニスでもベース・ボールでもやつた事のある人は、大きさは違つても兎に角ボールに慣れて居るから、余程上達が早いが、ボールといふものに始めて出遇つた人には、ちよつと思ふ樣にならぬものである。落ちたボールを取らうと思つて行く內に、ボールはバウンドして頭の上を越して飛んで遁げてしまふ。ボールが大きくてバウンドが高いだけ、はじめての人の持てあます事も一しほである。それを傍から見て居ると隨分可笑しいものである。丁度

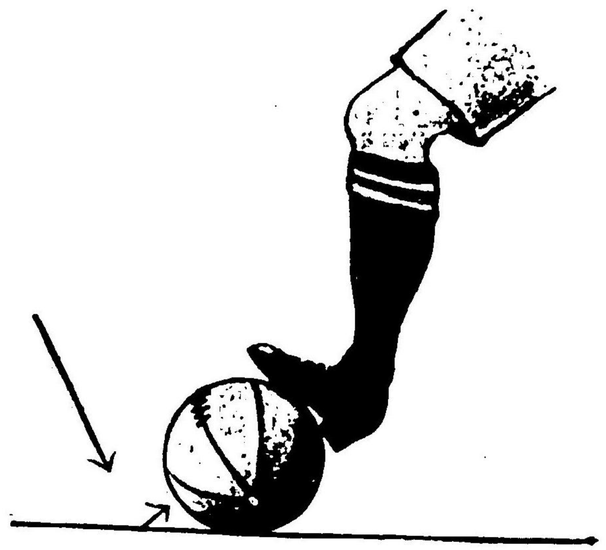
始めてローン・テニスをする人が、バウンドして上るボールを打たうとして逃がすのとよく似てゐる。扨てボールを上に蹴上げるのは、先づ兩手でボールを持つて腰の高さに前につき出して、それを手を放すと同時に足をあげて蹴る。この時足の何處で蹴るかといふに、足の爪先ではない。足首を成るべく伸ばして足の甲で蹴るのである。此れは四五回やる内にやれる樣になる。そして慣れると段々にボールが高く上る樣になつて來る。最初から強く蹴ようと思ふとうまくいかない。たゞ手をはなすと同時にボールが落ちる、その落ちるのに調子を合せて足をあげる位な積りでいゝ。斯ういふ風にしてボールと足とが何度やつても丁度うまく出會ふやうになれば、それから段々と足に力を入れるとボールは獨りてに高く飛びあがるやうになる。初から力を入れて強く蹴ようと思ふと、ボールの落ちぬ先きに空を蹴つてひつくりかへる事が屢あるから注意しなければならぬ。

かういふ風にして蹴るのが自由自在に蹴れる樣になり、又右足でも左足でも蹴れる樣になつたら、ボールを頭の高さ位まで投げあげて、落ちるのを前の樣に蹴り、それから段々と、蹴つたボールのまだ地に落ちぬのを蹴る。これが思ふ通りに蹴る事が出來る樣になつたらしめたものであるが、然し實際これは中々むづかしい。又飛んで來るボールを直ぐ蹴返すのでなく、それを落ちると同時に、高くバウンドをさせないで、足で抑へ付けて留めるのを練習する必要がある。この前に先づ地面をすつて來るボールを止めるには、その方に向いて片一方の足の爪先をあげて、踵を地から四五寸位はなしてボールを止める。ボールは足の下にもぐり込んで丁度掌て押へる樣におとなしく止つてしまふ。この時足を高くあげ過ぎると跳ねかへるがぬける憂はない。ボールはぬけて行つてしまふ。低すぎるとねかへるのはぬけるのよりはまだ余程ましてある。この足の高さの加減

がむづかしい。これが足を見ないで丁度適當の高さにあがるやうになると、面白いやうにボールが止まる。

それから地面をすつて來ないで飛んで來るのは、落ちて跳ね上らうとする處へ、前の樣に片足を持つて行つて居れば、ボールは落ちると同時に、ドゞゞといふ音をさせてそこに止つてしまふ。此れも踵の下をボールがぬけない樣に注意しなければならぬ。兎角足が高くあがり過ぎてボールをぬかすものである。左の圖に蹴て見たらよくわかるであらう。是れをやる時に、初めての人は足を高く一尺五寸もあげて、ボールが落ちてからこれを踏み付けようと、力を入れてうんと踏む人があるが、大抵ボールは後にぬける。ボールを踏み付けようと考へるよりも、寧ろボールのぬけ得ぬ位に足をあげて、ボールの落ちる處で待つて居るといふ風にした方が間違がない。この時落ちて來るボールをよく注意しなければならぬ。即ちボー

第二十五圖　ボール止め方　其一



ルが何處に落ちるか、この見計らひが早く出來なければいけない。落ちるボールを常に見詰めて、その落ちるところに片足をあげて待つのであるが、初めての人は兎角落ちる所より一間も手前で待つて居る傾があるこれは最も下手なやり方で、ボールは前の方でバウンドして、必ず頭を越して後に飛んで行つてしまふ。是非思ひ切つてボールの落ちる直ぐ下まで進まなければならぬ。要するに、是は極めて機徴の間に自分で會得するのであるから、これ以上には到底書くことは出來ぬ。

(二)パッス

その次がパッスの練習て、これをやるには一切、手を使はぬ事にしなければならぬ。幾人ても環になつてならび、隣の人との間を充分に廣くあけて居て、向う側の人になり、隣の人になりボールを輕く蹴つて渡す。即ちパッスする。近い處へは地面をすつて行く様に蹴り、遠い處へは地面から一二尺の高さに蹴るやうにする。三尺以上にも高く蹴るのは余りよくない。又たとひ高く蹴るにしても、やらうと思つた人のところて丁度落ちるくらゐてなければならぬ。即ち受け取る人の、最も受け易いやうにしてやらなければならぬ。受け取る方ては、前に基本練習のところていつた方法て受け止める。止めたら更にこれを誰かに蹴つて渡す。この渡す時の蹴方に色々あるのに又内側と外側との二色ある。足の横即ち側面て蹴るのと、足の甲て眞正面に蹴るのとある。横て蹴る。足の甲て蹴るのは、強く遠くやるに都合がいゝ、けれどもその代り高くあがり易い、又方向が思ふ通り正確に行かぬ事がある。足の横側てやると、ボールにあたる面が平たいから方向は正確に行く。然し余り遠くへは行かぬ。又眞正面にはやり惡い。但しこの足の横てやるパッスは、實際ゲームをする時に傍に居る味方に渡す時、是非用ひなければならぬやり方てあるから、充分に練習しておく方がよい。此練習をだん〳〵やる内には、來るボールを止めずに、直ぐに思ふ方向に蹴てやる事が出來る様になる。

(三)ドリブリング

獨りてボールを輕く蹴つて運ぶ練習て、ボールを自分の足から遠く放さずに、二足目か三足目毎に極々かろくボールを蹴る。強く蹴ると自分の走る勢があるから、意外に遠く行く。それを遠くへやらずに、遠く放れても一間か二間位にしてそして成るべく早く走る練習、これはゲームの時に大

第二十六圖　ボールを遠く飛ばさない蹴方（ドリブリングの蹴方）

切な事であるから、よく〳〵練習しておく必要がある。ボールを遠く先へ蹴てはいけないといふのは、ゲームの時に敵に取られる憂があるからである。ボールを遠く飛ばすまいと思へば、靴先をボールの下にさし込む樣にして、ボールの下の方の地について居るあたりを蹴る。即ちボールをきる。さうすれば飛んで行つて地についても、バウンドしてから殆んど先へは行かない。若しさうしないと、ボールはよく

飛んで行き、落ちてから又轉がつて行くからして、とても追付かれない。かやうなのはゲームの時は直ぐ敵に取られてしまふのである。初めの内は速く走らうと思へば、ボールは先の方へ遠く飛んで行つてしまふし、ボールをあまり飛ばすまいとすれば、走る方が留守になつて、殆ど走るとは言はれぬほどおそくなるが、段々と練習して、ボールを蹴つて、只走る位早く走れる樣になると、ゲームの時には非常に有効である。

（四）ドリブリングとパッス

今度は二人なり三人なり、三四間あひだをあけて横に並んで、パッスしつゝドリブリングをする練習である。パッスするのは前の走らないでじつとしてゐてやつたのを、走りながらやるのである、いつて見れば何でもないが、實際走りながらやるのは、余程樣子が違つて來る。練習してる内に漸々と走るのも早くなつて、尙傍を見る餘裕が出來て來る。右なら右、左なら左の

どのあたりに人が居るといふ事が、ドリブリングしつゝわかる様になつたら、走りながらそれにボールを蹴つて渡す。即ちパッスする。此時にはその人の一二間前方に蹴る様にするがよろしい。さうすれば受ける方も容易てある。右方の人にパッスしようとする時は、左足の内側か、右足の外側て蹴り、左方の人に渡すには、右足の内側か、左足の外側てやる。此場合決して足の甲ではやらぬ。前にも言つておいたやうに、不正確といふ缺點がある。のみならず、横の方へ足の甲て蹴るには、少し體の向きをかへて、横向きにならなければならぬ。それよりも足の横てやれば、正確て且つ横に體を向ける必要がない。又受ける方ては、靜止の場合の練習の様に、來るボールを止めてしまつてはまづい。來るボールを止めずに、直様自分の走る方向に向きを變へさせる。しかしこの時には余程注意しないと、ボールは横の方へぬけて行つてしまふ。

(五)ゴールに蹴込む練習

これまてのはゴールのない處ても出來る練習てあつたが、ゴールがあるともつと面白い、趣味のある練習が出來る。それはどうするかといふに一人はゴール・キーパーとしてゴールの下に立つ。多くの他の者はボールを蹴つてゴールに入れようとする。それをゴール・キーパーは防ぐ。即ち手て受け止めて蹴返したり、或は打ち返したり、又低いボールは直ぐに蹴返したりする。それを此方ては五六間から十間位隔つたところに居て、又ゴールに蹴込むといふ風にする。是はボールが三つ位あつてもやれる。寧ろあつた方がいゝ位。しかしゴール・キーパーの方ては、ボールが多いほど忙しくて、四つとなると續けざまにぼん〳〵と蹴込まれて、到底一々受け返す事は出來ない。蹴込む方ては、ゴール・キーパーの打ち返したり、蹴返したりしたボールに、一々手をふれない様に、實際のゲームの時の心得てやる。足

元に來るボールは、前に基本練習のところでいつた方法で受け止める。又高く來たボールは、兩足をそろへて腰を出來るだけ後に引つ込ませ、體を前にかゞめる樣にして、ボールが地に落ちない前に直接に胸に受ける。受けたボールは斜に胸にあたるから、跳ね返らないて腹から兩足を傳はつて足元に落ちる。(第廿七圖參照)これを巧みにやれば強いボールも足元に落ちる頃には、全く力がぬけてしまふ。此方法ては胸から腰の間の

第二十七圖　ボールの止め方　其二

へらせない爲めに、股を開くのてあるから、開き過ぎてボールをぬかすやうなことのない樣注意せねばならぬ。又右向きになつて右膝を曲げ、その高さのは止められる若し。足元よりは高く、腰よりは低い樣なボールが來た時は兩股を少し開いて。その間に夾むやうにして止める。しかし夾むのてはない。ボールの勢をそいで、強く跳ねか

第二十八圖　ボールの止め方　其三

曲げた内側て受け止める。此の方法は股から膝、脛、尚ほ下つて靴の内側まて有効てある。(第廿八圖參照)この時に右膝は眞前に上げるよりも、少し躰を右向きにして出す。さうすればあたつたボールは、地に落ちて跳ねかへる力が、非常に減つて來る。今假に右足てやつたが、左足でも同樣てある。これてボールの止め方は大抵わかつたらう。止つたボールは蹴るに最も都合がいゝ。ゴールに蹴込む時などは殊にさうてある。然し實際ゲームの場合には、中々ボールが十分靜止するまて、敵は待つて居ないから、勢ひまだ十分にとまらぬまゝのを蹴ねばならぬ。それ故練習の時にも、止める練習も勿論必要てはあるが、まだぼん〳〵跳ねてるボールを、そのまゝてゴールに蹴込む練習も怠つてはならぬ。殊にフォアワードなどは、平生からよく之を練習しておく必要がある。

ゴール・キーパーの事は、後の著者の經驗の條に、新帶氏が詳しく書くから此處には略す。

(六)コーナー・キック

全く靜止して居るボールを蹴る事は、實際ゲームの場合には極めて稀てある。蹴始めの時と、フリー・キックと、ペナルティ・キックと、是より外にはない。それも回數から言へば極めて少い。蹴始めは特に練習するほどのこともない。フリー・キックとゴール・キックとは、遠くやるのが重な目的てあるが、ペナルティ・キックとコーナー・キックになると、思つた的を外さずにやる必要がある、殊にコーナー・キックは、餘り低くては敵に妨げられる憂があるし、餘り高くては又風に方向を變へられる恐れがあるから、低からず高からずといふ高さて、思つた處に落ちるやうに蹴らなければならぬ。謂はゞ一種の間接射擊てある。コーナーからゴールの前まて、約二十間ばかりの距離があつて、さうしてゴールの直ぐ前に落ちるやう

にやらねばならぬから、随分むづかしい。是れは餘程よく練習しておかないと、とんでもない方へ外れてしまふ。それ故常にコーナーから蹴つて見る必要がある。右のコーナーから蹴る時は右足、左のコーナーから蹴る時は左足でやれる様に練習しておくと好都合である」この場合には前にも度々いつたやうに、靴の先で蹴つてはいけない。必ず足の甲即ち靴の背でなければならぬ。先て蹴つたボールは、正確な方向に行くものではない。これてゲーム以外の練習は、大體すんだわけてある。

少人數の競技法

フット・ボールは何しろ二十二人居なければ、正しいゲームは出來ないわけてあるから、學校などを除いて、他の所では、人數が揃はなくて正式のゲームの出來ぬ時が往々ある。かういふ場合はどうするか、少人數を以つてする競技法はどうか、といふ疑問は尤な事てある。正式のゲームてなくても、

兎に角敵味方に分れてやる時のやり方の内て、屢行はれるのは、シックスといふやり方てある。これは各組六人づゝてやるので、フォーアワード五人のところを三人、ハーフ・バック三人のところを一人と、それにゴール・キーパーとてある。此のやり方てあるが、各組七人づゝならば、ハーフ・バックに今一人を增して二人とし、八人づゝならばフォーアワードを增して四人とする。九人づゝになればフル・バックに一人を增し、十人づゝの時は、又フォーアワードに一人を增して五人とする、十一人づゝとなれば全く揃ふのて、即ちハーフ・バックも三人となるのは前に述べた通りてある。各組が六人以下ては、極狹い場所の外は殆どゲームの形もやれない。

第三節　服裝に就いて

フットボールをするには、身體を自由に動かし、敏捷に動かし、速に走るとい

ふ事が、最も必要であるから、從つてその服裝も、成る可く身輕で、體の窮屈でない樣なのがよろしい。それが爲めには、半袖のシャツに半ズボンを穿き、膝下までの長い靴下にフットボール用の靴を穿くがよいのである、今それを詳細に述べれば、

○シャツ

袖は半袖のが最も宜しい。長いのを臂の上まで折り返して着てもよいけれども、運動の中途で屢長く出て來てうるさいものである。半袖ので臂を出したら、轉んだ時にあぶなくはないかと、氣遣ふ人があるかも知れぬが、そんな心配は無用である。臂の少し上て切つたのが、經驗上最もよい。

布地、夏は勿論の事であるが、冬でも汗てぬれることが多いから、ぬれても冷くない樣なものが最も重寶である。夏は少し位ぬれたシャツを着てもあまり冷くはないけれども、冬季寒風を刺すやうな時にぬれたシ

ヤツを着てゐるのは、隨分つらいもので、衞生上にもよろしくない、毛織のものならば、汗てぬれた位では冷くなることはないから、出來るならば冬季だけても、毛織のものを用ひたがよい。

○ズボン

轉んだ時に膝を擦りむいては、との憂から以前はシャツの袖と同じく、ズボンも膝の下まであるのを穿いて居たのであるが、その後ズボンの膝にかゝるのは、走る時大に妨げになる事に氣が付き、思ひ切つて膝の上から、ふつつりと切つてしまつたのであるが、その走りよい事は實に驚くばかりて、しかも膝がむき出しになつて居る爲めに、轉んで傷をしたものは、これまでまだ一人もない。これは是非膝の上から切つて、走る時にズボンの先きが膝にからまることの、ないやうにしなければならぬ。又腰から太股のあたりは、すべて大きくだぶ〳〵に作つておかなければ、ズボンが少し

ても窮屈なやうな事があつては、走る上に大に妨げになるから、特に注意しなければならぬ。布地は強くて薄いがよろしい。ズボンは毛織には及ばぬ。

○胴〆

走りまはる内にズボンが段々と下がる憂があるから、ズボンの、恰度胴〆のあたるところに、三四ヶ所紐のやうな物をつけて、胴〆をそれに通してしめておけば、ズボンのさがるのを防ぐ事が出來る。茲に注意すべき事は、革製の胴〆に附いてゐる尾錠金であつて、この革帶を用ひる時は、よく注意して、尾錠金が他人にさはつても危險のない様にしなければならぬ。一寸したものでも、走る勢で意外の怪我をすることがないとも限らぬ。余も亦不注意な人のために、この革帶の尾錠金で怪我をした事がある。

○靴下

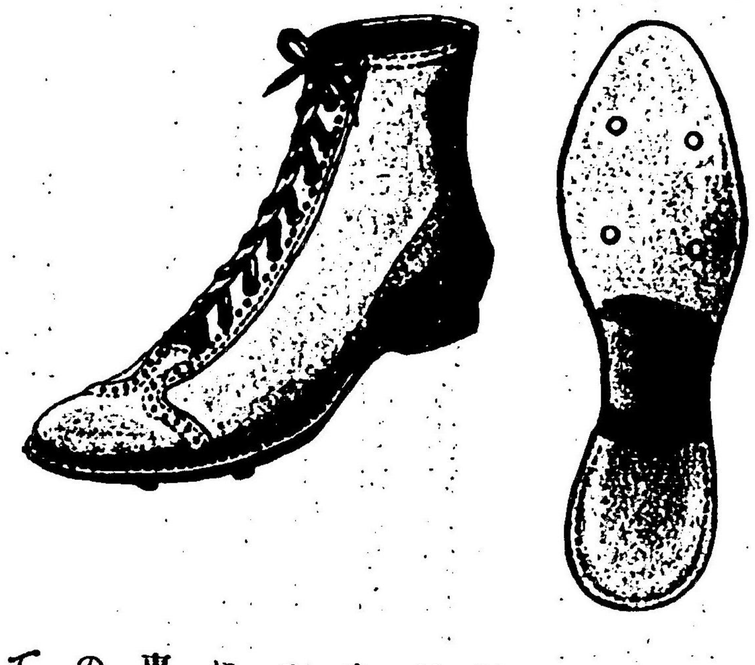
膝のすぐ下まであるものを用ひる。そして其の上部を靴下止めでとめ、その上に靴下の上端を折り返してゐる。がうすれば靴下止めも、物に引かゝつていたむ憂もない。靴下は長いものは短いものより高價なのは當然であるが、その破れるところは多く踵と爪先で、踵へても爪先へても穴が明くと、足に豆が出來易い。それかといつて、爪先が一寸いたんだきりの長い靴下を、廢物にして捨てゝしまふのも不經濟であるが、近來長い靴下の足先だけ、勝手に取り換へられるやうなのが出來て居る。誰でも輕便に取り換へる事が出來て、然も廉價で確かに經濟なものと思はれる。一度長いのを買つておけば、その後は足先だけを取りかへれば、もとの新調の時と同様なものになる。即ち二度目からは、足先だけの價で長いのが買はれるわけである。その取りかへるのも頗る輕便である。

○靴

第二十九圖　フットボール用靴

上圖に示す樣なもので、普通の編み上げ靴とよく似て居る。而してこの靴の特徴は、たとひ古くなつても底の取れない事である。普通の靴であれば、少しく古くなつたのでボールを蹴ると、直ぐに底がはなれて大きな口があくけれども、この靴に限つてその憂は少しもない。又靴先が特に厚く頑丈に出來て居て、ボールを蹴つた爲めにへこむ事がない。又靴先から上まで、

第三十圖　フットボール用靴



一枚の皮が特に附けてあるからして、間の縫ひ目から綻びる事はない。尙この靴の著しきところはその裏であつて、普通の靴の裏の樣に平でなく、横に棧が打ち附けてある。これは急に走り出し、又走つてゐて急に止る時などに、滑らずに思ふ通りに、止る事も出來、又た來り出す事も出來る爲めである。なほ棧の代りに、第三十圖のやうに、皮で疣を付けると一層滑らない。

但し是は只フットボールをする爲めにはよいけれども、平生穿くには不便である。

この靴は、普通の編み上げ靴よりも、少しく高價であるが、フットボールをするには、殊に普通の編み上げ靴の二倍以上永く持ち、又平生穿くにも少しもさしつかへはない。不斷に穿くにしても、普通のものより遙かに永く持つのは、吾々のこれまで經驗したところである。しかしこの靴を作るに慣れて居ない靴屋が多いから、注文の時には注意を要するのである。

○帽子

同じ服裝の人が二十二人、フィールド内を入り亂れて走りまはる時は、何れが味方やら敵やらわかりかねる。殊に始めてフットボールをする人々は、敵と思つて味方同士でボールを爭つたり、又味方と間違へて敵にボールを渡したりする事は決して珍しくない。これを避けるためには、色分けの帽

子を用ひるのが最も輕便であるが、帽子はヘッディングをする時に邪魔になるから、成る可く軟かて頭にしつかりくっついたものを選ぶがよろしい。

第三十一圖　運動の服裝

ヘッディングをした爲めに、帽子がぬげるやうな事があつてはいけない。

以上はフットボールをする爲めに、最もよき服裝に就て述べたのであるから、必ずしもこの通りでなくてはならぬといふのではない。讀者は各自夫々の事情に顧みて、取捨せられたらよからう。學校の體操の時間などに、人數の制限もなくやる時などは、ズボンの上をゲートルて

締め、上衣を脱いでやるのを見た事が屢ある。不完全ながらこれでもやれるやうてある。しかし短靴はゲートルの革て締めておかない時は、ボールと共に飛ぶ事がある。是れも體操の代りとしてやるのならば已むを得ないが、動作の敏捷を缺くを免れない。長い靴下の代りに脚絆を用ひ、又靴の代りに底の厚い足袋を用ふるのは、最も輕便て經濟的てある。足の爪先てボールを蹴るのは、如何なる場合てもいけないとは、前節のゲーム以外の練習といふ所に、詳しく述べておいたが、足袋て蹴る時は殊に注意しないと、爪先をいたくする事がある。普通の靴ても古くなつたのてやる時は、先て蹴ないやうにせぬと、底がはなれて大きな口があく事が多い。

特に靴の保存法について

靴は使用手入の法が宜しいのと、さうてないのとて、其の持ちが非常に違ふ、概して濡れる様な雨降、雪降の時に穿けば、無論全く穿かないわけには

行かないが其のいたむのは甚だしい。直き縫目がゆるむ糸がよわる。此故に斯様な時に使つた後は、成るべく、早く泥土などを、刷毛、又は布帛の切れて拭ひ去つて、多少なりとも濕氣を去らねばならぬ、泥のついて居る儘て日に乾すなどは尤もよくない。又泥などをきれいに取去らうとして水て洗ふのも甚だよくない。泥など拭ひ去つた後にはクリームか靴墨を塗つて置くがよろしい。磨かうとしても無論光澤は出ないから、わざ〳〵磨くには及ばない。さうして乾いた後には再びクリームか靴墨かを塗つて磨くがよろしい。一旦ぬらした後は如何に手入してもぬらさない時の様には無論ならない。又常に一度使つた後は塵埃などをよく拭ひ去つて、又一度クリームか靴墨かを塗つて磨いて置くがよい。次に使ふ時は今一度磨いて穿く。さうすれば靴の革は始終やはらかくて、穿きよいばかりてなくひゞが入つて割れ、穴の明く様な憂れは決してない常によく見る所の裔

藥を貼つた樣な修理が施してあるのは(多少は革の質にもよるが)多くは此の手入を怠つた證據であつて、之は無論我がフットボールをやる人のみが斯くあるべしといふのではないが、靴をよく使はねばならぬ吾々には此の注意が甚だ肝要である。中には使つた後直ぐ磨いて置いて、又更に穿く前に磨けとは餘り頻繁て、とても時間が多くかゝつて出來兼ねるなどゝ云ふ人もあるかも知れないが、之は一週間も二週間も甚だしきは一月も半年も、一度も靴を磨かずにおいて、さて手入して見ようとかゝるから、二三十分乃至一時間もかゝる。毎回此の手入を怠らずにすれば、一回磨くのに僅に二三分位て出來る。五分もかゝることは斷じてない。

フットボール 終

附錄

著者の經驗

第一節 小引

著者が今日までに見た運動遊戲の中て尤も痛快に感じたのは實に此のフットボールてある。如何なる點て痛快に感じたかは實際に見た人は直ぐ分かるてあらうが、その時間を守ること等て擧げ來れば色々あるが著るしく他と異つてゐる此の運動の特徴は先づ是れが主なるものてあらう。今一々是等を說明する迄もないが、時間を精確に守つて凡ての行動をなし、豫め一定の時間を定めて以て運動の勝敗を爭ふが如き、このフットボールの樣な運動は恐らくは他にあるまいと思ふ。この精神はやがて競技者

の頭腦を刺戟すること何程深いであらうか。

廣袤數十間のフィールドに馳驅し、攻撃逆襲、正々堂々の裡に、妙計奇策をめぐらして相戰ふ勇士の活動は痛快を叫ばざるものはない。

互に相投じ相抉ける秩序ある行動も、危機に際し變異を生ずるもの、是れは畢竟弱者の終局である。勁敵に遇ひて撓まず、膽益〻大なるは終局の勝者である。敵を知り己れを知り然る後徐ろに策を施すのは戰に臨む者の心得である。己れを知るには先づ己れの盡すべき務を十分に知るのが必要である。上來述べ來つたのは、重にゲームの方法や規定等についてであるが、競技者は多く、フィールドは廣いので常に協同一致して敵に當ることが必要である事は勿論で、之れと同時に各競技者がその任務を十分に知り盡して置く必要がある、而し細末の點まで一々本文の中に書き加へ難いから、今之れを別に一まとめにして順次に此處に述べるつもりである、

第二節　ゴール・キーパーに就いて

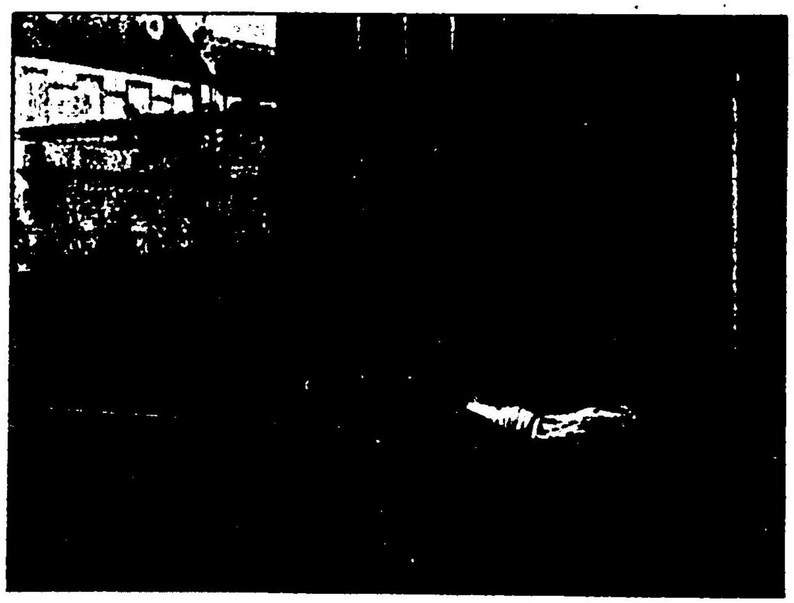
新帶國太郎

最後の防禦線に居つて、我が軍の危急存亡を救ふ重任は殆んどゴール・キーパーにあるのであるが、ゝる重任は常に沈着果斷の精神に富める人でなくては果されぬ。

躰軀は長大で、一擧一動苟くもせず、沈着にして而も、敢爲機敏、且つ常に綽々として餘裕を存する底の人を要するのである。

一、防禦の時　防禦の時は、敵に肉薄せられ壓迫せられて敵味方の士氣、一はあがり、一は沮喪する時である。此の時に方つて、最後の防禦線にあるゴール・キーパの活動如何は、やがて味方を死地より救ふか、遂に我が軍に敗北の汚名を負はしむるかの時である。死活の責任は凡てゴール・キーパー其人のみによるものではないのは無論で、我が全軍は皆之に與

第三十二圖　ゴールキーパーの奮戰



らねばならぬ。が然しゴール・キーパーが毅然と起つて危機に處し、適當の處置によつては群がる敵をよく追ひ拂ひ得るのである。敵が數十歩も遠い時には、ゴール・ラインから二三歩進んで居て、敵に乘ぜられない策をなすことが必要であるが、漸く敵が近づくに及んでは、最早やゴールの眞中のラインの上が尤もよい位置である。決して股を廣げすぎて立つてはならぬ。ボールがよく其の間を拔けてゴールを得られる事が

屢あるのみならず、少しく隔つたボールを防ぐ場合にも急速に歩を起されない故に、股は常に一尺位より廣げないのがよい。ボールが丁度脚の外方一二尺の所の地上を急に通る樣な場合には、手などで之を防がうとしても到底不可能であるから、斯かる場合こそ脚を急に廣げて防禦するのである。胸位から高い所を通つて來るボールは敢に手で止め易いが地上一二尺の高さで强く來るのは、之を受け止めるさへ困難であつて、之を直ぐ蹴返す樣なことは非常にむづかしいが而し練習によつては出來ないことはない。此の樣なのは强く飛んで來れば來る程受け甲斐がある。ゴール・キーパーの受けかへした場合には急に守勢が攻勢にかはることも間々ある。手でボールを止めるのは單に受けるだけては少しも實際の間には合はない。受け止めずに手でなぐりかへすか、敵が近づいて居ない時には之を愼重に尤も强く蹴つてやるなど、その

處置を手早くするのが肝要である。ゴール・キーパーがボールに觸れねばならぬ時分は、實に我が全軍の危急存亡にかゝはる時である。敵は無論肉薄して居る。さればボールを受けても之を更に蹴返す樣な隙は殆んどない。こんな場合にはボールが高く來れば直ぐ手でなぐりかへしてやる。低く來れば脚で直ぐ蹴返したがいゝ。手でやるのには無論平手ではだめであつて握り拳をしつかりかためて、うんといふ程、ボールをなぐつてやる。なぐる機會さへも得なかつたら握り拳でボールを前に働く。(其の法は前臂を平に動かす要領)拳の先でやれば可なりに間に合ふ。ボールを受け取る時の外は平手は嚴禁である。之は指や手首を痛め易いからである。拳でなぐるかなぐるか衝くかは屬行はれるやり方であつて、必ずしもボールを前の方へ投げるには及ばぬ、否殆どゴールの横の方へやるに限る。といふ譯はゴールの眞前へボールをかへしてやれば敵は

多くは待ち構へて居る、味方も防ぐに一生懸命、ボールは敵味方の入り亂れの中に入つてゴール・キーパーには誠に見にくい。加之眞前へ出す と敵は蹴るのに正鵠を得易い。それが橫ならば、こちらからはボールの位置がよく見分けがつくのみならず、橫の方から直ぐゴールを得らるゝことは少ない。此故に防ぐ方は常にボールを橫の方へ或はフィールドの外にまでも出してやる樣にするのである。之は防禦につとめて居る全軍をおちつかせる一つの方法である。然し何時もわざとやることは戒めねばならぬ。

ゴール・キーパーは強いボールが直接手に當るのを防ぐ爲めに、掌と甲とに護謨をつけた革製のグローヴ(手套)を兩手にはめることがある。此の手套は競技者に危險を與へる樣な金具をつけてあつてはならぬ。初めてグローヴを使ふと、兎角ボールを受け損ふことが多いから、多少練

習を要する。

遠方からゴールに向つて來るボールは近くから來るのよりは防ぐのにやさしいが、併しやさしいといつて油斷はならぬ。バウンドするのを蹴返すには丁度ボールが地に落ちた瞬間に蹴るに限る。はづんだのを蹴ようとすると大抵は失敗る。之はボールが回轉して意外な方向へ蹴ね上がる事があるからである。又受け止めるのにしてもうっかりすると受け損ふことがある。是等はよく〳〵注意すべきである。

ゴール・キーパーが手をつかひ得るのは、此の上もない特權であるから、巧に之が利用をはからねばならぬ。

二、コーナー・キックとペナルティ・キック　ゴール・キーパーがコーナー・キックとペナルティ・キックとに注意すべきである。

コーナー・キックの場合には、そのコーナーに遠い方のゴール・ポスト(柱)の

傍にそのコーナーに向つて立ち、敵がキックをすると同時にボールを見つゝゴールの中央、ゴール・ラインの上に來るがよろしい。敵は丁度ボールをゴールの前に落ちる樣に蹴るから餘程注意が要る。殊にゴールの前で敵はボールの落ちない前にヘッディングでゴールに入れようとする。ボールの勢は弱いけれども急に意外な方向へ來るので、ゴール・キーパーは之にまごつく事がある。斯樣なボールは大抵は高い所を通つて來るもの故、之を手で橫の方へなぐり飛ばしてやるが上策である。而し又上の方へ衝き上げてやるのも一法である。之はなぐるひまのない場合に限るのであるが、再びコーナー・キックをやられる憂ひが多いから成るべく手早くなぐる方が良策である。

次に尤も愼重の注意を要するのはペナルティ・キックに對する時である。ゴール・キーパーが之に對する場合には尤も心を冷靜にして蹴る敵の

様子に深く注意して、どちらにボールをよこすかを洞察看破して之に備へねばならぬ。敵はボールを高く蹴るとゴールを越す憂ひがあるし、横に蹴つても外へ出てしまふ憂ひがあるから、多くは尤も強い熱球を地上一二尺の高さに多少左方へ蹴つてよこす(之はゴール・キーパーが普通左が利かないのを利用するのである)からよく之を心掛けて置かねばならぬ。而し此の場合に決して狼狽苦慮してはならぬ。泰然自若として敵を睥睨するの意氣と、迅速機敏にボールを防ぎ得る覺悟とを以て、斷じて敵に乘ぜらるゝことのない確信を持たねばならぬ。何！來たら蹴返へしてやらうとの意氣、是は既に敵を呑んで居る。唯こゝに愼むべきは些事を輕々しく看過せぬ事である。殊に敵の視線に深く注意して居ればボールを何方によこすかは殆ど窺ひ知る事が出來るのである。

三、攻撃の時　敵を攻撃する位置にある組のゴール・キーパーは甚だひまな様に思はれて居る。然し實に決してさうでないどんなはづみに敵が熱球をよこすかも知れない。今攻勢をとつて居る我が軍が俄に守勢に變はる様な事は屢あることである。此等の場合にゴール・キーパーは常にボールの運動と彼我兩軍の配置とに注意し絶えずゲームの形勢を監視してゴールの前を緩歩することにつとめねばならぬ。初めはゴール・キーパーになると味方の攻勢の場合には何もすることがないと思つて一處に股をひろげてじつと立つて居たり、甚だしきは競技者でないものと雜談に耽つて居て、ボールがどこにあらうと味方はどうならうと一向に頓着しないで居るが如きは以ての外である。敵の蹴つた熱球は宙を飛んで來る。こちらのゴール・キーパーは一向かまはずにござる様では啻に其の職責を盡さざるのみならず、我が全軍の士氣を沮喪

せしむることはどれ程であらうか、之に反して敵の意氣は益〻盛になつて到底當り難いもののあることは吾人の屢〻見聞する所である、かゝる場合に常によくボールに注意し、全軍を監視することを忘らないゴール・キーパーは、機會を逸せず臨機應變の行動を以て敵の氣鋒を挫き、熱烈なる蹴返へしに敵の膽を寒からしむる如き痛快なる活動で、全軍の意氣を壯にする事が出來るのである。之れを以て見てもゴール・キーパーはよく〳〵熱球を蹴返へすの脚力を不斷から練つて置く必要がある而し又一方にはゴール・キーパーの特權たるボールを手に取つて蹴る事は尤も安全な方法である事を常に忘れてはならぬ。此故にボールを巧に手にとる方法を練習する必要がある。然しながら手にとることは全く其の時の緩急によつて決する。殊に敵が我が前に近づいて居る場合は悠々手にとるが如きことは斷じてやつてはならぬ、ボールを手

にとる瞬間に於ては敵はゴール・キーパーに向つて突貫し來るは必然である。ゆめ〳〵してボールと共にゴールの中に押し込まるゝが如き不覺をとつては我が全軍の意氣にも及ぶ事であるから、深く注意して機に臨み變に應じて、速かに適當の處置をとらねばならぬ。即ち速かに蹴る、衝く、なぐる等は是である。敵は遠く、直ぐ迫まられる憂ひなしと確信した時こそ、即ちボールを手にとつて強く遠く蹴つてやる時である。危急な場合に逡巡狼狽するが如きものは、到底ゴール・キーパーの資格はない。如何なる必要に迫まられて、ゴール・エレアから出ても速かにゴールの前にひき返へさねばならぬ。味方は如何なる場合に意外な不利な地位に陷るかも知れぬ。知れないのに常に備へるのが競技又戰爭の秘訣、事を未發に防ぐの覺悟は一刻も忘れてはならぬ。不利の地位に陷つたら之を有利の地位に挽回するのが我がゴール・キーパーの常に心

掛くべき大切な事である。

四、ゴール・キック　ゴール・キックはゴール・キーパーか又はフル・バックのする仕事の中で重要なものである。我が全軍が敵の壓迫をうけて防禦に尤も力を要する時に方つて、此のゴール・キックを得るは誠に味方に有利な時機、敵を前方三間以上に立ち去らしめて、悠々全力を込めて蹴ることが出來る時、守勢は將に攻勢にもかへ得べき好機、ゴール・キックの任は甚だ重いと云はねばならぬ。其の何れの方向へ蹴るかは蹴る人の勝手であるが、蹴出しても直ぐ見す〳〵敵にボールを渡す樣なことがあつては、それこそ此の乘ずべき好機を逸して再び不利の地位に立たしむるものである。夫故に成るべく味方のフォアワードに渡す覺悟でやらねばならぬ、蹴つたらそれで任務が終つたのではない。味方にボールをとらせて敵地に進ましめ、自分は蹴つた爲めに進み過ぎて居るから直樣も

との位置にひき返さねば、何時、如何なる敵の熱球が來ないものとも限らない。常に油斷をしないのは不覺を取らぬ唯一の心得である。

敵が蹴つたボールがアウト・オブ・プレーにならうとする時はわざと之を止めないことがある。是は上述のゴール・キックを利用せんが爲めてある。

五、フル・バックとの連絡　フル・バックはゴール・キーパーの兩脇であつて、この二人がよく働いたらそれこそゴール・キーパーは、おちついて其の任務を果すことが出來るのである。而しゴール・キーパーとフル・バックとは其の職掌は同樣に防禦てはあるが、フル・バックの方は手を使はれないのと敵に逃らるゝ事があるのとて自らゴール・キーパー程十分に防禦力をもたぬ、三人は左右前後に常に連絡して我が全軍を安全に置く事、殊に守勢となれる場合には尤もこの事が重要てある、ゴール・キーパーは常

にフル・バックに自分の視線を遮らない様に活動することを注意せしめねばならぬ。殊にコーナー・キックの時は格別此の事が必要である。常に互に相信じて個々には決して油斷をしてはならぬ。

六、ゲーム以外の練習　ゴール・キーパーは日頃練習の時にも常に萬全を期して、自己の立てるゴール内には決してボールを入れない覺悟を以てするを要する。之は尤も重要な練習法で、有らゆるゴール防衛の方法を會得する唯一の手段である。

附言　上來攻撃、防禦など夫々項を分けて述べて來たが、攻撃の場合、防禦の場合と別々に起るのではない。攻撃中に突然防禦の位置に立つ事もある。たゞ此所には説明の便宜上、各項に分けて述べたのであるから、その積もりで讀んで貰ひたい。

第三節　フル・バックに就いて

重藤省一

フィールドの上の位置から見ても働くべき任務から考へても比較的困難である所の我がフル・バックに當つて見ようとする者の第一に起る問題は如何に防禦すべきかといふ事である。フル・バックは防禦第二線にあるのである、直ぐ後ろは敵が力を集中するゴールである。夫故に最もよく戰術計略に長ずる事が必要である。他の競技者とは違ひ些細な失錯も著しい結果を生ずるのである。ハーフ・バックやフォーアワードは失錯する事があつても、よく之を挽回する機會があるけれども、フル・バックに至つては、殆ど恢復すべき機會は少ないと謂つてよろしい。

フル・バックに當つて見ようとする人はその技を磨くに先つて此の重且大なる責任と義務とを知らなければならぬ。

(一)奪　球 (Tackle)

奪球はフル・バックの任務の第一要件である。よく強く蹴ることも必要であ

るけれども奪球はそれよりも一層必要である。何となればボールを蹴るには之を自分のものにしなければならぬからである。奪球に必要な條件は大膽なる事である。こゝに云ふ大膽といふのは勿論無謀なことをいふのではない。無謀なる競技者ほど我がフット・ボールに危險なるものはない。結果の如何も省みないでボールを得る爲めに敵軍に突進するなどは斷じて避けなければならぬ。ボールを奪ふ方法も色々あるが同一の戰略を絶えずくり返へす時は敵に弱點を示すもので機に應じて變ずべきは言を俟たない事である。

然らば如何に奪球すべきか第一に攻撃の方法を研究して然る後に應戰の策を講じなければならぬ。攻撃の方法も色々あらうが此處には一々擧げる事を得ないから二三の例を示して置くに止める。

一、敵のアウトサイド・フォーアワードがボールを巧に運んでコーナー近くまで進み來つてそのセンターにパッスする場合、此の時ボールを奪ふ爲めには兩者の中間に向つて突進するのである。（寧ろコーナーに近く）

二、敵がボールをインナーか又はセンターにパッスするに何れとも分らない樣な場合、此の時は敵は計略をめぐらすであらうから、その兩者に向つて進んでもだめてある。故に敏速にそのボールに向つて突進してそれを奪はんとするのである。その時は敵は必ずパッスすることは殆どきまつて居るから、急に方向を變じて其のパッスするボールを遮り奪ふのである。

三、アウト・サイドからアウト・サイドにパッスするボールを奪ふには素早く蹴り手に向つて突貫して之を妨害するのである。此の時は必しも其のボールを奪はないで宜しい。蹴り手に妨害を加へるのが目的である。妨害を受けた蹴り手は決して正確にパッスする事は出來ない故必ず方向

を過るのである。そのボールは他のフル・バックがよく奪ふことが出來るのである。

(二)明確なる判斷

奪球に尤も必要な條件は明確なる判斷である。判斷を確實にするには觀察が緻密でなければならぬ。敵味方のボールに對する一擧一動は絶えず熱心に注意して一度ボールを奪はうと決心した時には、少しも猶豫しないて、決心したる即時に之を實行しなければならぬ。一旦判斷を下しながら躊躇したり半途で止す樣なことは嚴禁である。敵は如何に猛烈に來るとも一度決心したら直ちに之に突進する。假令身は倒れても其の判斷さへ明確であつたならば敵の計畫を挫くことが出來るものである。

(三)蹴方の姿勢

蹴ようとする場所の二三歩後ろから馳せ進み充分足先に力を入れ、膝を

伸ばして強く蹴出し、同時に蹴つた足の方の手は十分後ろに引くのである。

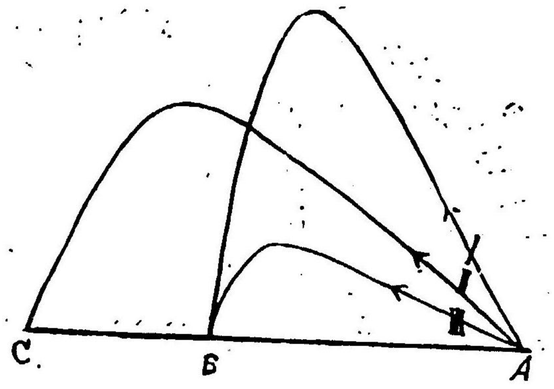
(四)確實なる蹴方

奪球について必要なのは確實なる蹴方である。フォーアワードやハーフ・バックと違ひ、いつても強く遠く蹴ることが肝要である。それは無論ボールを味方のゴールから出來得るだけ遠ざけしめねばならぬからである。遠く蹴る事。ボールを遠くへ蹴るには無暗に高く蹴つてもだめである。丁度地面と球の方向との角度が四十五度位に蹴ればボールは最も遠く飛んで行く。同じ力を出しても角度によつてボールの飛んで行く距離は大いに違ふ。之を圖で示すと次の樣である。

ABCは地面を想像して書き

Aはボールの位置、

第三十三圖



IIIIIIは同一の力を以て異なつた角度に蹴る方向、B及びCはその到着點を示すものである、蹴る時に一々その角度を測るわけには無論行かないが四十五度位に蹴るのが尤も遠距離に到達する理由だけは分かるであらう。

(五)任意なる方向への蹴方

自分が欲する點にボールを蹴ること即ち方向と距離とが思ふ通りに出來るには、全く多くの練習を積んで、其の要領を自得するより外に殆んど道がない、從て之をこゝに述べるのは一層困難てある、而し之は甚だ重要なことてあるからその練習の筋道なりとも記して置かうと思ふ。

普通の練習には二三人相手があればそれてよい、即ち相互に任意の距離に居つて丁度其の人に達する樣にボールを蹴ることを努めるのてある。此に注意すべきはボールを足の先の邊て蹴つてはならない、靴の先端は圓いからボールの當り樣が少しでもわるいと、とんてもない所へ行くからてある、夫故靴のさきて蹴つてはならぬ、成るべく平たい所をボールに當てる樣にするがよい、靴の横側てやるのも又一法てある、外側よりは内側を使ふのは安全てある。

距離の加減は全く實際練習の結果覺え込まなくては到底口て述べることが出來ない。

方向と距離とが定まる樣になつて來たならば、次は强く蹴ることの練習をなさねばならぬ、之も要領を示すことは困難てあるが、腰に力を込め脚全體てボールを蹴る樣にするが肝要てある。

(六)蹴方の種類

フル・バックはゲーム中、場合によつてボールが地上に靜止せること、或は跳ね上る事、又は空中を飛び來ること等があるのに應じて常に尤も適當に遺憾なく蹴ることが必要である。今此等色々の場合を順次に說明しよう。但し此の蹴方は單にフル・バックには限らない。何れの競技者も必要なことは勿論であるが特にフル・バックは此の心得が肝要であるから、こゝに述べるのである。

一、靜止せるボールを蹴ること、

之は最も全安な蹴方であるが、ボールに力が入り難い。之に力を入れるには脚力の強いことが必要なのは勿論、ボールを蹴るとき二三歩走つて脚に餘勢をつけることが肝要である。

二、地上をころがり來るボールを蹴ること、

之も前者について安全な蹴方である。只方向を誤らない用心が肝要である。

三、バウンドせるボールを蹴ること、

此の蹴方の困難な點は、ボールがバウンドして何の邊に落ちて來るか、又どの位の高さの所に來たのを蹴るべきかといふ其の要領を呑み込むことであるが、之は實地練習を積んで自然に其の要領を覺え込むより外に道がない。

四、フライ・ボールをとめて蹴ること、

空中を高く飛んで來るボールを蹴るに最も安全なのは足て一旦それを止て蹴るのである。ボールを足でとめる事は大に練習を要する事で、之は前節ゲーム以外の練習の所に詳しく述べてあるからこゝには之を省いて置くが、とめてからの蹴方の要領は前數項のと略同樣である。

五、ヴォレー Volley

之は空中を低く飛んで來るボールを直接に蹴る方法てゲームの際敵より來たボールを最も速に且つ強く蹴かへすには甚だ有効な蹴方て、蹴方の中ては最も目ざましいものてある。而し隨分危險な蹴方てある。何となれば極めて誤り易い、そして又よし蹴つたにしても　分の思ふ方向に蹴ることが甚だむづかしいからてある。此の蹴方に通ずるには最も多くの練習を要するが而し十分に練習を積んだならば出來ないわけは無論ない。

六、半ヴォレー

丁度ベース・ボールていふシート・バウンドに當る。バウンドの瞬間を蹴る呼吸は全くボールを受ける呼吸と同一てある。隨分練習を要するものてあるがその効果は實際上著しいもので、間髪を容れない瞬間の早

業は此の半ヴォレーによつて得らるゝことが多い。

(七)ヘッディング（第三十四圖（ヘッディング參照）

蹴るのてはないがボールが足元まて落ちて來る瞬間を爭ふ場合には頭（實は上額てヘッディングをやる。後節センター・フォーアワードの所に記して あるから今特に述べないが、之は遠くにボールをやる目的てなくて瞬間を爭ふ手段てあるから、之て直ちに蹴るのと同樣の効果ありなどゝ考へたならば大なる間違ひてある。之れの後には必ず味方が續行して其の歩武を進むる必要があることを忘れてはならぬ。（或る特別の場合即ちコーナー・キックに際して敵のゴールに肉薄してヘッディングによつて直ちにゴールを得ようとする時の如きは無論別てある。）

(八)快速なること

更にフル・バックに必要なる條件は快速なる脚力てある。輕快を特有とする

敵方のフォーアワードは肉薄してもフル・バックの快速なる脚力によつてよく之を制することが出來る。のみならず敵の巧みなるパスを遮つて我れを翻弄する自由を與へない底の脚力は一にその快速なる特質を必要とするのである。

(九)ゴール・キーパーとの連絡

たとひハーフ・バックが破られても敵の鋒先きは凡てフル・バックで必ず喰ひとめる覺悟がなくてはならぬ。よくつとめるフル・バックはゴール・キーパーをして安全に其の任務を盡させることが出來る。然し全力を盡さうとして却つてゴール・キーパーの働を妨げたり、視線を遮つたりする例は時々見る所である、之はよく氣脈が通じて居ないからである、この間の氣脈がよく通じ、巧みに連絡が保たれて居れば決してこの樣な事はない。

第四節　ハーフ・バックに就いて

最初吾々はハーフ・バックを左程重大な役とは思はなかつた。攻撃は主としてフォーアワードがやるし、防禦は又フル・バックとゴール・キーパーとの任務で、その間に居るハーフ・バックは、言はゞ遊撃軍位なものと思つて居た所が段々と經驗を重ねて行く内に、遊撃どころではなくて、實に重大な役目である事を悟つた。ハーフ・バックは實に全軍の中堅である。

(一)一般の注意

フォーアワードやフル・バックは攻撃か防禦か一方だけやればよいのであるけれども、ハーフ・バックは、フォーアワードを助けて敵を攻め、フル・バックやゴール・キーパーと共に防禦にも加はり、攻撃にも防禦にも、共に十分に力を盡さなければならぬので、ゲーム中少しも息をつく暇さへない。初めから終りまで、引きりなしに最も激しく活動しなければならぬ。此樣な重大な役で、從つて飽くまで精力が續かなければならぬ體力が殊に必要である。

敵のフォアワード五人が揃つて攻め寄せて來る時は、先づ五人の間の連絡を斷ち切つて、五人を箇々別々のものにしてしまふ。箇々には弱い敵でも、巧みにその連絡を保つて居る時は、極めて有力なものであるから、攻勢を取つて居る敵に對しては、先づその相互の連絡を斷つてしまふのである。連絡の斷たれた敵の攻撃力は頗る薄弱なものであるから、その攻撃は半ば挫けたといつてよい。

(イ)奪球の方法

次にそのボールを奪ふのであるが、是は中々の難事である。先づ一人はボールよりも、ボールを持つて居る敵に向つて突撃する。そして何でも彼でも兎に角その敵を妨げる。初からボールを取らうと思つても、中々取れるものではない。只身を以て敵を妨げる。さうするとどんな敵でも大抵はボールがあやつり切れなくなる。かうしておいて他の味方にそのボールを

取らせる。かうすれば必ず取れるが、自分は敵を妨げるだけで他の味方にバックになる人は敵のボールを一人て易々と奪ふことが出來る位てなくてはならぬが、ボールを奪ふ秘訣は、決してボールを目がけて行つてはならぬ。是非そのボールを持つて來る敵を妨げてボールを放させるといふ事を忘れてはならぬ。急に敵の足元につけ入つて、敵をしてボールをあやつる事の出來ぬ樣にしてしまふ。ボールを取るのは其の次の事で、最初からボールに向へば、取れぬ事が多い。若し取る事が出來たとしても、それは取られた敵の方がまづいのであつて、こちらの手柄ではない。取つたボールは成る可く早くフォアワードにパスしたら即ち攻撃の第二線となつて其後に續いて進む。

(ロ)防禦の方法

自分の後にはまだフル・バックやゴール・キーパーがゐるなどゝ思ふのは、最もよくない事である。自分は最後の防禦線であるといふ覺悟で、極力防禦に盡さなければならぬ。如何なる場合でも、ボールを持つてゐる敵のフォアワードを自分の後にするのは、ハーフ・バックには嚴禁である。直ちに馳せ返して、そのボールを奪はなければならぬ。こゝが最も骨の折れる所で、ハーフ・バックが特に非常の精力を持てゐなければならぬといふのは、この樣な場合が屢〻起るからである。味方のフォアワードと共に全力を盡して、攻撃をしてゐる最中、若し誤つて敵のフル・バックなりハーフ・バックなりにボールを奪はれると、そのボールは多くは敵のフォアワードにパスされる。この時に氣を落さずに、直樣猛然と引き返して、そのボールを奪はうとするには、實に無限の精力とたゆみなき速力がなければ出來ぬ事である。そしてこれがハーフ・バックの最大要務である。

(二)センター・ハーフ

敵のセンター・フォーアワードと常に對抗しなければならぬ役であるから、常にその監視を怠つてはならぬ。成るべく敵のセンター・フォーアワードから餘り遠ざからぬ樣にするがよい。たとひボールを以つて居ないと思つても何時敵のハーフ・バックなり、或はフル・バックなりが蹴つてやるか知れぬ。ボールの速力は非常に早いから、その時にあまり遠ざかつて居ると騷いても間に合はぬ事が多い故始終遠ざからぬやうに心掛けるが肝要である。敵のフォアワードのウィングがボールを持つて攻めて來る時、かういふ場合は殊に敵のセンター・フォーアワードに注意しないで居ると危險である。敵は逸早く好い位置を占める。倘それを知らないで、ボールを持つて居るウィングにばかり氣を取られてゐるとそのボールは必ずセンターにパスされる。その時に始めて、是はしまつたと騷いても、間にあはず、あつ

と思ふ間にボールは早やゴールの前に運ばれて、思はぬ不覚を取る事がある。敵がコーナー・キックをする時には、殊に敵のセンター・フォーアワードに注意するのが必要である。若しも此の注意を怠ると、一挙にゴールを衝かれる恐れがある。

(三)ライト・ハーフとレフト・ハーフ

(イ)投入の方法

タッチ・ライン外にボールが出た時に投げ込むのは、ハーフ・バックのライトとレフトとの役目である。右に出た時はライト・ハーフ、左に出た時はレフト・ハーフが投込む。投入む時の姿勢は、前編ゲームの規定のところにもかいてあるが、両足の爪先をタッチ・ラインの上にきちんと揃へる事は、必ず忘れてはならぬ。又投げる際に飛びあがつてはいけない。ボールは必ず両手で持ち、頭の後まで十分にやつて、頭の上から投げる。投げる方向は随意であ

るが、顔は正しく前方に向いて居なければならぬ。敵に取られぬ様に、味方の人に投げてやる事は、投込む人の第一に注意すべき事である。(第六、七圖參照)

(ロ)味方のコーナー・キックの場合

味方がコーナー・キックをする場合にも、大抵はハーフ・バックのライトかレフトかゝその任にあたる。ゴールの正面二三間の處に落ちるやうに蹴るのが肝要である。風などある時は、高く蹴ると意外に吹き寄せられる事があるし、低く蹴て中途て敵に取られるのは最も不利益てある。それ故に通常はゴールの前に行くまては、人の丈よりは高くなければならぬが、途中て敵に取られさへしなければ、成るべく低くやる方がよい。右側のコーナーから蹴る時は右足、左側のコーナーから蹴る時は左足て蹴れるやうに練習しておくと有効てある。片足しか利かなくて、コーナー・フラグが邪魔に

第三十四圖　クッキ・ーナーコ
（りよーナーコ右）

輕快な人が多い。その上殊にドリブリングが上手で、タッチ・ラインに沿うて、短兵急に攻め寄せて來ることが多い。それ故これに對抗して立つ味方のなる樣ではいけない。

（第四編第二節ゲーム以外の練習、六、コーナー・キックの條參照）

(ハ)敵のフォーアワードに對抗

敵のフォーアワードの兩翼、即ちアウトサイド・ライトとアウトサイド・レフトとは、最も

ハーフ・バックの兩翼、即ちライト・ハーフにレフト・ハーフは、又それに匹敵する位に早く走る必要がある。速力が劣つて居たら、技術は勝つて居ても、そのボールを奪ひ取ることはむづかしい。段々味方を壓迫して來ると、敵は成るべくボールをそのセンター・フォーアワードに渡さうとする。味方ではまたさうせられると頗る危險であるから、出來る限り橫の方へ、即ちタッチ・ラインの方へ出さねばならぬが、中にやられてから橫の方へ出さうとするよりも、敵のウィングの運んで來るボールを、初めから中の方へやらせないやうに、即ちセンターに渡させないやうにするのが、最上の策である。この重い責任は、ライト・ハーフとレフト・ハーフとの負ふ可きものである。

第五節　フォーアワード

(甲)アウトサイド・フォーアワード　細木志朗

何んなゲームでも、規則方法に外れない限り、掛引きといふ事をする。此の

掛引きが上手になれば自分が餘り働かずに敵を苦しめ、勞せずして敵を操ることが出來る。前に第三編で述べた所は、只、ゲームの仕方や規則を述べたのみであるから、之れよりは聊か悟り得た掛引きのことや、その他に前に述べられて居ない事て知り得たことを述べよう。

(一)任務に就て

一般にフォーアワードは攻撃を主なる任務として居る。防禦はゴール・キーパー、及びフル・バックの兩者が主として、その任に當るので、フォーアワードはハーフ・バックの援助を得て、專ら攻撃を事とし、敵のゴールを得る事をつとめるのであるが、その中でも全じく攻撃に當るといつても、アウトサイドはセンター等とは少しく趣を異にして居る。センターは敵のゴールにボールを込むことを尤も重要な任務とするのであるが、それ以外の四人のフォーアワードの者、殊に左右のアウトサイドの者は、ボー

ルを敵地に深く運んて、自分の方のセンターニ蹴渡し、ゴール攻撃の機會を與ふるもので、センターは直接にゴール攻撃の事に從ひ、他のフォーアワードはセンターを介して間接にゴールを攻撃するものといつてよろしい。殊にアウトサイドにあるものは自分の位置からいつても、ゴールに對して斜に位して居るから、自らゴールに蹴込む機會は殊に少く、又有るにしても、センターがゴールの眞正面から蹴込むのに比して、その効力は實に微々たるものであるから、非常な好機會を除く外はセンターに蹴らせるのが得策である。

(二)資格に就て

前に述べた様な任務を遂行するには如何なる資格が必要であるかといふ事を一言しよう。

(イ)動作の輕快なること

フォーアワードは一般に敵陣に肉薄してゴールを得んとつとむるものであるから、敵の妨害を受けることも中々多い。敵陣近くなればなる程、妨害は益々はげしくなるのである。敵のハーフ・バック又はフル・バックは色々な方法によつて、自分のゴールに近寄らしめぬ様、又ボールを掠奪しようとつとむるのであるから、若し動作に機敏軽快を缺いて一瞬時でも敵に先んぜられたならば、折角苦心して運んで來たボールを敵に奪ひ取られて、骨折損の草臥れ儲けとなることであるから、飽くまで敵にボールを取られない機に、又敵の備への不十分な間にゴールに蹴込める様に、速にボールを運ぶことが肝要である。敵がボールを掠奪せんとし自分が取られまいとする時は、實に危機一髪の瞬間を爭ふもので、一瞬時でも動作の早い方が目的を全うするものである。アウトサイドに位するものは敵陣深くボールを運んでセンターに蹴渡すのを主たる任

務とするものであるから、此の動作の軽快は尤も必要である。遠く味方からパスすることもあらう。又敵のボールを掠奪して我がものにせんとする時もあらう。此の如き場合に遅鈍な動作をして居ては、到底目的を達することはむづかしい。

(ロ)ボールを扱ふに巧なる事

動作の軽快なるに伴うてボールを扱ふに巧てなければならぬ。身體計り軽快に動いても足の修練が不十分でボールが之に伴うて動かねば何の効もないのである。敵は前より横より突進してボールを掠奪せんとする時には巧に身をかはして、敵の妨害を避くると同時にボールをも失はぬだけの技倆を伴はねばならぬ。敵陣近くになれば敵の妨害せんとするものは一人に止まらず、二人又は時には三人の妨害を受けることがあるから、若し此等の妨害を切抜ける事が困難であるを思へば

直ちに味方のものに渡し、又味方のセンターが丁度都合よければ、直ちに蹴渡してゴールに蹴込ませる様、パスしなければならぬ。二人又は三人の敵の妨害を受けてもボールを奪ひ取らるゝ事なく、却つて敵勢を牽制してゴールの守衛を不十分ならしめ、機を見てセンターに渡しゴールに蹴込ましむるだけの技倆が必要てある。

此等の事に至つては書物を見たり人に聞いたりするのみては、到底自分のものになるものてない。自分が實際にボールを扱つて練習して初めて不知不識の間に會得し熟練するものてあるから、何より先づ自分の練習を第一とする。練習はゲームを行ふ事が出來れば尤も宜しいが、ゲームが行はれなくても二人三人フィールドに出て互にボールを取り合ふのてある。斯くボールを弄ぶ間には自然とボールの性質もわかり、筆にもかけぬ又口にも述べられぬ所謂呼吸を會得し得るものてある。

又その間には動作も自然と機敏になり身體も練れて、容易に疲勞することのない様になるから、なるべくボールに多く接する事が習熟の近徑てある。

(ハ)駈ける事の速きを要すること

フットボールには此の駈ける事が基礎となるので、何れの任務にあるものも速力がはやいことは必要てある。アウトサイド・フォーアワードにあるものは此の資格の必要なることは云ふまてもない事て、速力が少しても敵よりも大なれば數倍の利益がある。丁度速力の優つた艦隊が速力の劣つた敵の艦隊と對抗して利益のあるのと全じ事てある。

駈ける事の早い事も一時的ては効が少い。終始一貫てなくてはいけないゲームの初め、身體の元氣の旺盛な時には隨分快速力ても、段々疲勞して最初の様に駈けられぬ様ては、敵に乘ぜられて意外な不覺をとる

ことがあるから、ゲームの進むに従つて益〻元氣盛に、愈〻疾走の速かなる機、絶えず練習して置くことが大切である。毎日缺かさずゲームをやるとか、又はゲームてなくとも廣い場所てボールの後を追うて、身體を練るのが有効である。又身體が強壯てあれば、之に伴うて自ら駈ける事も速くなる道理てあるから、常々身體の攝生に注意することを怠つては ならぬ。

(三)攻勢にある場合の心得

攻勢にある場合のアウトサイド・フォーアワードの働き方を述ぶるに當つて、先づゲームの初まりから、如何にすべきかを述べよう。

ゲームを始むるに當つて、味方の組が最初に蹴始めをなす、即ち攻勢をとることとなると、アウトサイドのフォーアワードーは、左右のインナーの二人がセンターに接近して位置するに反して、本來の位置即ちハーフ・

ウェー・ラインの兩端に近く居て、レフェリーの笛を合圖に敵地に突進する。味方のセンターの蹴つたボールは先づインナーに渡されるのが通例てあるが、サークルを取卷く敵の圍みを破つて出づることは中々困難な事てあるから、逸早く、アウトサイドに渡すのが尤も有効てある。アウトサイドにあるものは此の覺悟を以て、蹴始めの合圖と共に速やかに進んて、味方のものからパスして來るボールを受け取る用意をせねば ならぬ。

攻勢にある時は味方同志は、殊にフォーアワードの五人は互によく連絡を保つて敵を攻勢せねばならぬ。只だ一人、敵陣に突つこんても効力が少ない。必ず味方の援助を待つて成功するものてあるから、一人が進めば他も從つて進み、相助け相依つて共々に攻撃せねばならぬ。

ボールを敵陣深く運ぶには、アウトサイドの者は比較的行ひ易い。即ち

一方はタッチ・ラインであるから、此の方面から敵が來て妨害する氣遣ひはない。只他の一方及び前方からと、インナーの如く四方から妨害に來るのであるが、他のセンターがあるが、之は習熟すれば左程な心配もなくなる。此の如くにして敵のつてよろしい而しタッチ・ラインからフィールドの外にボールを逸する事コーナーに近く進んだならば、直にセンターに渡して、ゴールに蹴込ましめるのであるが、若し、センターの近所に敵が居て妨害しさうであるとインナーに渡して蹴込ましむるのも亦一策である。センターはゴールへ蹴込む役目のある事であるから、敵も中々注意して容易にその機會を與へないから、傍のインナーのものと共同して敵を牽制するとか、或は敵の注意のおろそかになつて居る自分と反對のサイドの味方の者に渡して虚に乘ぜしむるとか、適宜の法をとらなければならぬ。

(四)守勢にある場合の心得

フォーアワードの任務は主として攻撃にあるので、味方のゴール防禦の事はゴール・キーパー及びフル・バックが主として此の事に當り、ハーフ・バックも亦之を援助するのであるから、守勢にある時はフォーアワードは全く力を用ふる必要はない。上述の三者に一任して居つてよろしいのである。甚しく後方に退いて防禦を助ける事は、却て不得策である。何時でも味方からボールを送つて來ると直ちに受取つて、攻勢を取りつゝ敵陣に肉薄することの出來る様に位置せねばならぬのであるから、丁度味方のバックしてよこすのが届く位の處に位置して、味方のバックを待つのが得策である。敵が攻勢をとつて居る時は、敵のフォーアワードは勿論、ハーフ・バックも進んで敵のゴールの近邊は大抵フル・バック及びゴール・キーパーを殘す位になつて、その防禦力は甚だ少くなつて居るのである

から、此の虚をついたならば大に奇功を奏する事が度々ある。

(五)パッスの仕方、及びボールの止め方

パッスすることは何れの任にある者も必要であるが、特にフォーアワードの者は敵の妨害を受ける事も多いから、勢ひ、ボールを奪はるゝ事を避くる爲め、安全な位置にある味方にパッスしなければならぬ必要が度々ある、殊にアウトサイドにあるものは敵のゴールを得るのには、主としてセンター、又時にはインナーの力を待たねばならぬのであるから、パッスする場合も從つて多い譯である。

パッスの要件としては自分よりも成るべく、安全にして而も成るべく、ゴールに蹴込み易い位置にある味方に渡すことが必要であるから、たとひゴールに近く味方が居ても周圍に敵が監視して居て、奪取せらるゝ恐れのある時は、却つて少しくゴールに蹴込むには都合がわるくても

安全な位置に居る味方に渡す方が得策である場合もあつて、時と場合とによつて一言に述べ盡すことは出來ない。

パッスの仕方は近い味方に送る場合は、餘り強くやらずに味方の少し前方に蹴やるのがよい、遠方の味方に敵を越えて送る場合には、餘り高からず丁度敵の頭の少し上を通過する位に可なりに強く蹴れば、敵の横取を避くる事が出來る。地面をころがし、又は弱い蹴り方では敵に取られる恐れがある。餘り高いのは味方が之を受け惡いので大に損がある。

凡てパッスする場合には味方の者の一間許り前に落ちる位に蹴つてやれば、受手は丁度走る勢を止めないでボールを受け止め、再び、運動を起す無益な時間と勞力とを省く事が出來る。(ゲーム以外の練習(五)參照)殊に疾走しつゝある味方に渡す場合には、とりわけて此の事に注意せねばならぬ。パッスの巧拙は受取る味方には大いに關係のある事で、渡すも

の受取るもの、其に巧みにして初めてパスの効力があるものである。一方だけ上手でも効力はないのである。

又ボールを受け止むるには、足、體、又は頭等と場合により一概に述ぶる事は出來ないが、要するにボールが自分の體に當つて跳ね反して甚しく遠方に飛ばない樣に受け止めねばならぬ。敵が近くにある場合には殊に此の事に注意せねばならぬ。

(乙)センター・フォーアワード　落合秀保

(一)一般の注意

元來フォーアワードは攻撃ばかりを專門として居るので、防禦を主とするものよりも、敵に取つては煙たく思はれるのは無理からぬ事で、フォーアワードの一擧一動に對しては、敵は常に綿密に注意して、一々妨げようとして、決して思ふやうには行動をさせない。それ故どういふ風にして今度は

攻めようと思うても、そのそぶりを敵に覺られぬやう、形にあらはさぬようにしなければならぬ。あからさまに計畫をやりかけると、敵は全力を盡してその計畫を打破しようと力める。それであるから攻撃の方法は、秘密にして決して之を敵に覺られてはならぬ。

敵のゴール近く攻め寄せても、その位置の關係上から、最後に敵のゴールに蹴込むのは、殆どセンター・フォーアワードの任務であるから、敵のゴールの附近に攻め寄せると、敵は最もこれに注意し、決してセンター・フォーアワードを自由に働かさない。一人位は附ききりて妨害するから、餘程敏捷にやらなければならぬ。

(二)アウトサイド・フォーアワードとの連絡

敵を攻撃するに、正面からするのは最も困難である。多くの場合にウィング、即ち左右兩翼の何れかにボールを送つて、初めそのウィングにドリブれる